

2 自然



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「700さいの大すぎ」	わたしがそだつ町	岩見 文彦(安芸高田市立吉田小学校)
(2)	「待月」	身近な自然の美しさ	小原 智穂(三次市立田幸小学校)
(3)	「時をおよぐクジラ」	自然と共に生きる喜び	石村 誠(庄原市立東小学校)
(4)	「モリアオガエルを守る」	自然を大切に	松葉 伸恵(神石高原町立豊松小学校)
(5)	「恐羅漢」	自然に対する畏敬の念	今田富士男(安芸太田町立戸河内中学校)



教材活用例(1) 「700さいの大すぎ」

〔小学校低学年 主題：わたしがそだつ町 内容項目：4の(5)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—清神社の大杉—について〉

清神社の石段を登りつめた本殿の前，境内の東西に等間隔をおいて，大杉が6本そびえている。推定樹齢700年とされていたが，平成11年9月，西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた大杉が中途折損して，横臥した。その折に，樹齢を数えたところ，700年を越えていることが確かめられた。この杉は，戦国時代から，歴史の生き証人として，吉田町を見守り続け，多くの人に親しまれ，崇敬されている。昭和43年，吉田町天然記念物に指定された。

奈良時代	大杉が植えられている清神社は，京都祇園社の荘園吉田荘の鎮守として創建された。
戦国時代	境内に杉が植えられた。
元禄6年(1693年)	現在の社殿が造立された。
昭和43年(1968年)	吉田町天然記念物に指定された。
平成11年	西日本を中心に吹き荒れた台風18号で，「観音杉」と呼ばれていた6本のうちの1本の大杉が中途折損して，横臥した。



(イ) 4コマ絵

主人公とおじいさんの散歩から，清神社の大杉に出会う話を設定した。おじいさんから大杉についての話を聞き，見慣れている大杉の生命力や力強さに初めて気付くとともに，大杉に対する愛着や親しみを感じる主人公の気持ちを中心とし，起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	郡山公園や清神社におじいさんと散歩に出かける。	大きな杉の木と出会う。そこでおじいさんから，700年も生き続けていることを聞き，びっくりする。	おじいさんの話から空に向かって一直線に伸びる大杉は，吉田の人によってずっと守られてきたことを知る。	友達と遊ぶ場面では，ぜひこの大杉を友達に見せたいと思い，遊びに行ってみないかと誘う。

イ 資料の解説

【作成の要点】

低学年の発達の段階を考えると、ようやく自分の住む地域という考えがもてるようになってくる頃である。本資料は、自分が住んでいる身近な地域にある神社の境内にある杉の木に焦点をあてる。いつも何気なく目にしている木であるが、700年もの永い間この地域に生き続け、多くの人々の心のよりどころになっていることに気付くという内容にしたものである。

郷土愛を扱った本資料をきっかけに、2学年の学習活動だけでなく、今後3学年「わたしたちのまちはどんなまち」社会科、4学年「郷土につたわる願い」社会科、5、6学年「文化財を描こう」図画工作科、6学年「戦国時代」社会科など、地域の文化にふれる体験や学習活動、地域行事との関連を図りながら、地域社会と接点をつくることができると考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

平成11年9月24日、台風18号で一本（周囲4.8m、樹高45m）が根元14mを残して折れ境内に倒伏した。横臥した「観音杉」は、幹回り約4.8メートル、高さ45mで、二番目の高さだったが、下から3分の1のところが、地響きを立てて折損した。境内は玉垣に囲まれて、北側には本殿・梶若社ほか、東には神楽殿、西に神輿殿とお蔵、南には民家があり、大災害が予想された。しかし、被害はなく不思議がられ、誰からともなく「身代わりの杉よ」と言われた。残った部分に倒木の危険があり、やむなく伐採することになり、平成11年師走、伐採清祓祭を斉行し、多くの皆さんに見守られる中で、石州在の木匠の手により、静かに倒伏された。根元部分を約1メートル掘り下げて、回り約5.5m、厚さ約30cmを切り出して据え付け、平成12年8月10日、毛利元就公郡山入城の日を選んで竣工清祓祭を斉行、「神木殿」と名付けて、永く後世に残すことになった。また、大杉がある境内は、地域の人によって毎日きれいに掃除されている。



ウ 資料全文

「700さいの大すぎ」

「おーい ひろし。 おじいちゃんと こおり山こうえんに さんぽに 行かないか。」

「うん おじいちゃん。こおり山こうえんなら、せいかつかの べんきょうで 行ったことがあるよ。」

学校の すぐうらだよ。」

ひろしは なんだか わくわく してきた。

こおり山こうえんに つくと まっさきに てんぼうだいへ あがった。ひろしは、ここから見る吉田の町が 大すぎだった。

「ひろし。おじいちゃんより もっとおじいちゃんが いるんだよ。すがじんじやに あいに行こうか。」

「すがじんじやは お正月に行ったことがあるけど……。おじいちゃんのおじいちゃんっていなかったけどな。」

すがじんじやに ついたが なにもなかった。ひろしは すこしがっかりした。

「これが、おじいちゃんの おじいちゃんだよ。」

ひろしのおじいさんは、にっこりして大きな木の前に 立ちどまった。

大きな木が 目の前に5本あらわれた。

「うわあ。でっかい木だな。なんていう名前の木なの。」

「大きいすぎの木だから 大すぎと いうんじやよ。」

「ひろし、この木は、なんさいだと おもう。」

「おじいちゃんの おじいちゃんだから 100さいくらいかな。」

ひろしは、じしん まんまんに こたえた。

「は は は。ひろし この大すぎは おじいちゃんが子どものころから ずっと ここに あったんだ。ここで 友だちと いつも よく あそんだもんじや。」

「なつの あつい日も ふゆの さむい日も たいふうや ゆきや 大あめにも まけず なんと700ねんも ここに 生きている木なんじや。だから 700さいじや。」

ひろしは、なんだか ふしぎな きもちになった。

「ひろし おじいちゃんと手をつないで この木をつかまえられるか やってみよう。」

ひろしは おじいちゃんとだったら 手をつなげるかなとおもって おもいきり 手をのばしたが まったく とどかない。おじいちゃんのすがたは この木ですっかり 見えなくなった。

「ひろし ゆっくり 大すぎのうえのほうを 見てごらん。」

青い空に まっすぐ 一ちよくせんにのびている すぎのてっぺんは、もう空に とどきそうなくらいだった。大すぎのはっぱや えだのあいだから たいようのやさしい光が さしこんでいた。

ひろしは そっと大すぎを さわった。木のかわをよく見ると たてに大きくわれ そのわれ目に ゆびがはいりそうで ごつごつとしていた。上のほうには カナブンやセミがたくさんあつまって 楽しそうに 休んでいた。大すぎも にっこりわらっているように見えた。

「おじいちゃんが生まれる ずっと前から この吉田の町の人たちや こおり山にすむ どうぶつや 虫たちを 700年ものあいだ やさしく見まもっているんじや。」

「この木たちを見ると なんだか元気がわいてくるんじや。」

おじいちゃんは、ゆっくりとベンチに こしをおろした。

「ひろし ここから見てごらん。5本の大すぎが話をしているように見えんか。」

木のねもとの まわりも きれいにはかれ 草一つない。ちいきの人が毎日 きれいにして まもりつづけていることを おじいちゃんがおしえてくれた。

ひろしは しばらくじっと5本の大すぎを見ていた。

「おーい ひろしくん。あしたの土よう日 どこかへ あそびに いこうよ。」

「どこが いいかな。そうだ みんな すぐ近くに とっておきの場所があるんだ。みんなで行ってみようよ。」

そういって ひろしは、にっこり わらった。



エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の大杉に対する思いに共感し、郷土への親しみや愛着をもたせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

(ア) 主題名 わたしがそだつ町 4ー(5)

(イ) ねらい おじいさんの話や大杉に触れることにより、清神社の大杉に親しみを感じていく主人公の気持ちを考えることを通して、生活している吉田の町の植物や自然に愛着を深め、親しみをもとうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「700さいの大すぎ」

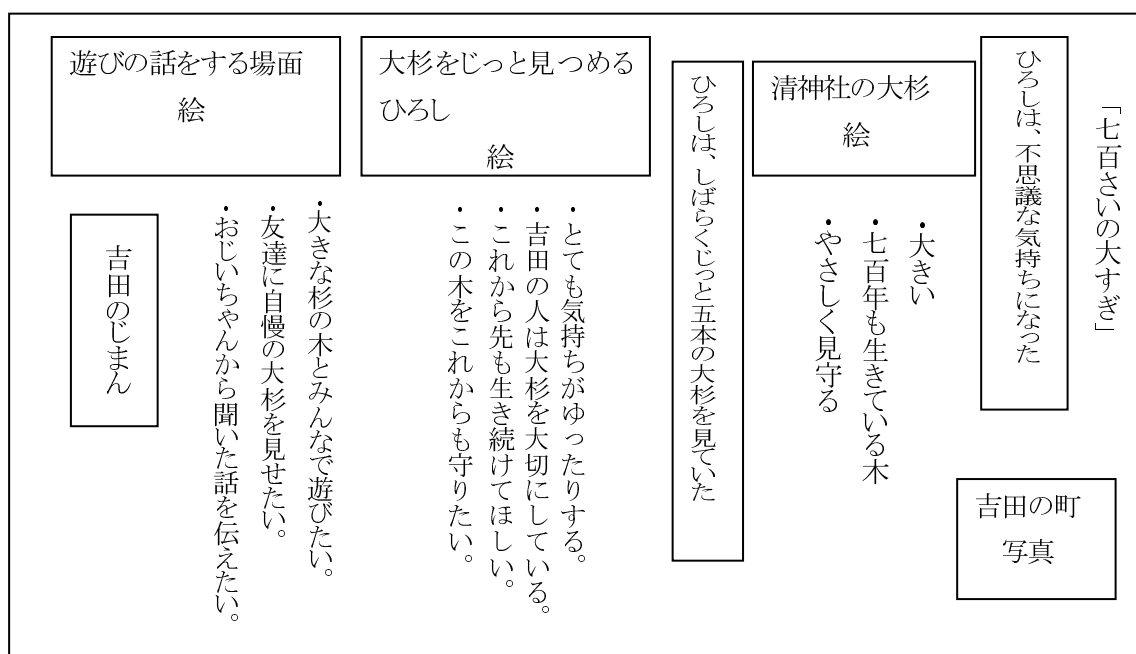
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 ここはどこクイズをする。	○ これは、どこにあるでしょう。	○ 資料に興味や関心をもたせる。
展開	2 資料を聞いて考える。 ○ 700 年もこの吉田に生きている大杉の話を聞いたひろしの気持ちを考える。 ○ 大杉が地域の人に守られている話を聞いた後に、じっと大杉を見つめるひろしの思いを考える。 ○ 友達に大杉を見せたいひろしの気持ちを考える。	○ 700 歳の木と聞いてひろしは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・大きな木だな。 ・700 年も生きている。 ・夏も冬も負けずに生き続けている。 ○ おじいさんの話を聞いた後、ひろしは、じっと5本の大杉をどんな気持ちで見ていたのでしょうか。 ・なんだか気持ちがいい。 ・吉田の人は大杉を守っている。 ・これからも生き続けてほしい。 ・この木をこれからも守りたい。 ◎ ひろしが友達に、「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言ったのはどうしてでしょう。 ・大杉の木とみんなで遊びたい。 ・友達に自慢の大杉を見せたい。 ・おじいさんから聞いた話をみんなに伝えたい。	○ 清神社の様子や「700 年」がイメージできるように当時の人々の生活の絵を紹介する。 ○ 最初がっかりした気持ちと対比させる。 ○ よしずで作った円周 5 mの幹を手で囲ませ、大杉の大きさのイメージをもたせる。 ○ ひろしの大杉に対する親しみや愛着の気持ちを、書く活動を通して気付かせる。 ○ 「とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。」と言うひろしと友達のやりとりを役割演技を通して、ひろしの思いに共感させる。 ☆ 役割演技により、主人公の大杉に対する愛着や親しみについての共感的な理解を深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 身の回りにある古くから残っているものや、これからも守り続けたい吉田の自慢について話し合おう。	○ 吉田町の伝統行事や地域の人々の取組にも目が向くように補助発問をする。
	4 吉田の自然や文化を VTR で見ながら、今日の学習を深める。	○ 吉田の町や自然の VTR を見よう。	○ 吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたりしたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを感じさせる。
終末			

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

板書は、おじいさんと散歩に出かけ、700歳の大杉に出会った主人公が少しずつ親しみや愛着を感じていく思いが視覚的にとらえられるようにする。そのためには、児童の発言を順番に全て書くのではなく、分類、整理、多様さを構造的に示すようにする。

低学年の児童が教材を理解しやすいように、紙芝居風に提示した場面絵を活用しながら、分割して掲示していく。また、発問に関連するキーワードを掲示し、場面絵とセットで書き、分類、整理する。その際、親しみや愛着にふれた発言を赤色で示す。

終末では、中心発問場面の板書のとなりのスペースをスクリーンとして活用し、板書の一つとして、吉田の自然や文化、行事をビデオで見せるコーナーを設定する。

「わねてのそくち」

年 組 ()



わねてのそくちをきいて、うめを
うめをきいて、わねてのそくちをきいて、
うめをきいて、うめをきいて。

(2) 活用のポイント

低学年の発達の段階を考え、本資料の主人公に重ねての大杉に対する親しみや愛着の気持ちを考えさせることが大切である。そのために、発問や表現活動（主人公になりきった役割演技）、資料提示の工夫を通してねらいに深く迫ることができると考える。

ア 発問の工夫

主人公のひろしの大杉に対する気持ちの変容を共感的に考えさせるため、3つの発問を「しばらくじっと見ていた。」「とっておきの場所」をキーワードとして、大杉がおじいさんを含め、吉田の町の人にとって心のよりどころになっていることを感じ取らせたい。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

友達を大杉のある場所へ遊びに誘う場面で、児童に主人公の役割を与え、即興的に演技することで、道徳的価値に対する一人一人の感じ方や考え方が明確になり、実感的な理解につながるものと考えられる。

ウ 資料提示の工夫

低学年の児童が教材に興味関心がもてるよう、中心的な場面を分割しながら紙芝居のように提示する。そのことが、低学年の児童の理解を手助けすることになる。また、700年生き続けた大杉の年月の長さが実感できるよう配慮したい。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開前段では、清神社についてがっかりしていた主人公が「700年も生き続けている大杉」を初めて知り、「700年も生きていてすごい。」「台風や大雪にも耐えていてすごい。」という気持ちになった主人公の思いに共感できた。

また、おじいさんと手をつないで大杉を捕まえる場面では、よしずで作った円周5mの幹を手で囲ませ、大杉の大きさのイメージをもたせた後に、「おじいさんの話を聞いた後、ひろしはじっと5本の大杉をどんな気持ちで見ていたのでしょうか。」の発問を行った。「ぼくが、大人になっても大杉に生き続けてほしい。」「大杉のために何かし

てあげたい。」「虫たちも集まってきて、自然っていいな。」「ぼくも遊んでみたいな。地域の人が掃除しているからきれいなんだね。」「元気が出て、うれしくなった。がんばってみたいくなって、元気が出た。」といった自然や郷土への親しみや積極的に関わろうとする能動的な側面にふれた心情に共感できた。

イ 表現活動の工夫（役割演技）

中心発問の、「ひろしが友達に『とっておきの場所があるんだ。みんな行ってみようよ。』と言ったのはどうしてでしょう。」では、役割演技を行い、セリフの後に「どうして?」と問うた。主人公が感じた郷土への親しみや愛着を「ブランコも滑り台もないけど、友達にも大杉を見せて、一緒に遊びたい。」「おじいさんから聞いた話をしえてあげたい。」「700年も生きてい木を見せて、みんなに元気になってほしい。」という意見が出された。児童の考えや思いを役割演技を通して交流することで心の安らぎやしみじみとした情感に思いを寄せることができた。

ウ 資料提示の工夫

導入では、写真を見せながら「ここはどこ!」と身近な清神社の大杉に興味関心を高めることができた。

展開では、場面絵を活用し、紙芝居風に範読した。板書にも活用したことで状況がつかみやすかった。また、700年前の様子を昔の絵を提示したことにより、「えーそんなときから吉田にあったんか。」など、700年の歳月がつかみやすくなった。

終末では、吉田の町には、みんなを元気づけたり、大切に守り続けたりしたい自慢なひと・もの・ことがたくさんあることを具体的な写真を活用してスライドショーで提示した。吉田の自然や文化、行事について改めて親しみや愛着を感じさせることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

本学年の児童は、昨年度生活科で「春を見つけに行こう」「秋を見つけに行こう」など郡山

公園や清神社を探検している。また、今年度の遠足では、清神社を含めた郡山でフィールドワークを行っている。

第3学年では、社会科「わたしのまちはどんなまち」という単元で、地域のよさを見つける活動を行い、この「700 歳の大杉」を含め、自然のすばらしさや親しみや愛着を感じることができる。また、終末で見せたとんどや一心祭りなどの地域行事や花いっぱい運動を行っている地域の人、あいさつ運動に立ってくださっている地域の方など、折にふれて本学習と関連をもたせていくことができる。

(5) 心のノートの活用

本授業では、終末に「心のノート」PP. 88-89 の「あなたが そだつ 町」をモデルに、具体的な吉田の町を素材としたひと・もの・ことをビデオで見せる場面を設定した。その画像にも、「地域の中での体験を広げる」「自分の体験と重ねる」「今、生活しているこの吉田の町について、もっと知りたい」という思いが膨らむように心のノートの絵に添えてある言葉を参考にテロップを入れて提示した。

今後、本授業と関連をもたせた他教科、領域の学習のまとめとして、「心のノート」PP. 90-91 の「あなたの 町の すてきな ところを しょうかいする 新聞を 作ろう」を参考にする。その新聞作りを通して、自分の町を意欲的に調べ、吉田町の文化や生活に親しむことができるよう、行事に参加した時の思いや考えを「書く」ことを通して、じっくり深めていく。そして、「わたしを そだてる 町」に一層愛着をもたせる。



教材活用例(2) 「待月」

〔小学校中学年 主題：身近な自然の美しさ 内容項目：3の(3)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—景色「待月」—について〉

「待月」は、三次市出身の奥田元宋画伯の代表作の一つである。

この作品は、辺りが次第に薄暗くなる頃、山並みから、月が今にも顔をのぞかせようとするその瞬間をとらえたものである。緑の山は、月の光を背に受けながら、川面に姿を映し、ほの白く浮かび上がるように描かれている。この作品は、昭和24年日展に出品され、特選と白寿賞を受賞している。本作品は現在、広島県立美術館で所蔵されている。

この絵のモデルとなった景色は、今も当時の面影を残し、四季折々、三次の馬洗川沿いに美しい姿を留めている。

明治45年 大正元年 (1912年)	双三郡八幡村(現・三次市吉舎町)に生まれる。
昭和5年 (1930年)	上京し、児玉希望の内弟子となる。
昭和20年	疎開のため郷里に帰る。その後昭和28年までを郷里で過ごす。
昭和24年	「待月」が日展において特選・白寿賞を受賞する。
平成15年	満月の夜に死去する。
平成18年	三次市に「奥田元宋・小由女美術館」が開館される。

画家 奥田元宋画伯の略歴



(イ) 4コマ絵

主人公が、身近な自然に感じていた思いが、絵とモデルになった景色を重ね合わせて見ること、身近な景色に対して、心情が大きく変化する場面を中心場面にして、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	身近な山や川に関心がもてず、紹介したい景色がなかなか見つからない主人公が、祖父にいい場所を教えてもらえることになり、期待に胸を膨らませる。	美術館で奥田元宋画伯の「待月」の絵を観て、三次の山や川の風景が美しく描かれていることに驚く。	「待月」のモデルとなった景色が今も変わらずあり、その景色を観て、身近な自然の美しさに感動する。	すぐにカメラのシャッターをおさずに見つめ続ける。

イ 資料の解説

【作成の要点】

近年、身の周りに自然が少なくなっている地域に限らず、自然豊かな地域に住みながら、自然の美しさや不可思議さに目を向ける機会が少なくなっている。身近にある美しい自然や気高い美術作品等に意識的に触れようとする態度を育て、素直に感動する心を育てるためにねらいを設定した。

中学年は、社会的活動が広がることで、自然などへの関心が広がる時期である。校区のみならず市内の自然や公共物、美術作品に関心をもたせ、美しいものや気高いものに出会い、感受性や想像する力を高めることができる考える。

主人公の心情が大きく変化した場面で、これまで意識していなかった身近な自然を美しいと思う気持ちを素直に表現できるように書く活動を取り入れた。書く活動を話し合い活動に生かし、新たに学んだこと、感じたこと、考えたことの交流を行い、自らの内面の変化を振り返ることができるようにした。

資料提示において、写真と絵を活用し、それらを並列に提示することで、主人公と同じ視線で資料に浸らせ、中学年の児童に主人公の心情の変化をより共感的に捉えることができるように工夫した。



【心に響くちょっといいはなし】

日本画家 奥田元宋画伯は、昭和19年空襲により、大作十数点を消失する。昭和20年、空襲が激しくなった東京からふるさとにもどってきた。ふるさとに帰ってきた奥田元宋画伯は、画家として活動していくことに悩んだ。その時、奥田元宋画伯の目にふるさとの自然の美しさが映る。自分の心に浮かんだ自然の景色と重なる場所を探し回り、馬洗川から望む景色を見つける。その景色をスケッチし、『待月』が生まれた。『待月』は同じようなモチーフで何枚か描かれている。それまで、主に人物画を描いていた奥田元宋画伯が、風景画家として活動を始める原点となった絵である。その奥田元宋画伯の心の景色となる場所は、現在も当時の面影を残したままの美しい姿を見せてくれている。



奥田元宋・小由女美術館



「待月」をイメージした庭

奥田元宋画伯と妻であり、人形作家の小由女先生の名前で、三次に建設された奥田元宋・小由女美術館には、「待月」にちなんで、山並みを背景に池が作られ、東の空に月を臨むことができる庭が造られている。満月の夜は、開館時間が延長され、その庭に浮かぶ満月を楽しむことができる。

ウ 資料全文

「待月」

たかしは小学4年生です。

夏休みに、先生から、

（三次の自まんでできる景色を見つけてしょうかいしよう。）という宿題が出ました。

たかしは、（三次の自まんかあ・・・鵜飼いや霧の海・・・いろいろあるけどぼくだけの自まんの景色をしょうかいしたいなあ。）と、思いました。

けれども、しょうかいしたい景色はなかなか見つからず、夏休みも後一週間となってきました。困っているたかしを見て、おじいちゃんが声をかけました。

たかしから宿題の話を聞き、

「たかしだけの自まんのけしきか・・・。三次の山や川もいいんじゃないか？」

と言うと、たかしは、言い返しました。

「そんなの三次じゃなくてもどこだってあるし、どこもみんな同じだよ。」

おじいさんは、しばらく考えていましたが、

「そうだ。いいところを教えてあげよう。」

と言いました。たかしは、大よろこびです。

「本当！やったあ！じゃあ、カメラを持って行ってぱっちり写して来よう。」

「その場所をみて、ただカメラにのこすだけじゃなあ・・・。」

おじいさんは、たかしを見て、自信ありげに笑いました。その顔を見て、たかしは、

「そんなすごい場所なの！」

と、ますます喜びました。

二人は、さっそく出発しました。おじいさんは、車を走らせながら、

「たかし、いい天気だな。ほら、川がきれいだぞ。」

と話しかけましたが、たかしは、これからどんなすごい景色がみられるのかとわくわくしていて、何も答えませんでした。

車が着いたところは、奥田元宋^{おくだげんそう}・小由女美術館^{さゆめびじゅつかん}でした。

「ねえ、美術館は、友達は何人もしょうかいするって言っていたんだよ・・・。」

たかしは、小さな声で、つぶやきました。そんなたかしにかまわず、おじいさんはどんどん美術館の中に入っていました。

たかしは、奥田元宋さんの絵をみながら、

（すごい絵だな。もしかしてすごいってこの絵のことかな？でも三次の景色じゃないよなあ。）と思いました。

絵を見終わってホールに出た時、たかしは、展示してある一枚の絵がふと目にとまりました。

「この絵、きれいだなあ。山も川もこの絵みたいだときれいだよね。」

たかしが、そう言うとき、おじいさんは、

「この絵は『待月^{たいげつ}』っていうんだ。三次の画家、奥田元宋さんが、ふるさとの自然の美しさをこの絵に描いたんだ。おじいちゃんはこの絵が大好きなんだ。」

「ふるさとして、この絵は三次のけしきなの？」
たかしは思わず、聞きました。おじいさんは、にっこり笑って、
「さあ、たかしに話した、いい場所に行こうか。」
と、言いました。

おじいさんは、たかしを車に乗せ、さっき通った川ぞいの長土手で車を止めました。
「ここが、たかしにみせたい場所だよ。」
「この川？ここは、さっき車で通った所じゃないか。」
がっかりしながら、車からおりたたかしは、はっとしました。いつも見ていたはずの川の景色が、さ
っき美術館でみた『待月』の絵と重なって見えたのです。
おじいさんは、そっと言いました。
『待月』は、この山と川をかいた絵だよ。奥田元宋さんが美しいと思ってかいた景色を60年たった
今もこんなに近くで見ることができるなんですばらしいだろう。」
山の緑。青い空。川の水は、おだやかに流れています。たかしは、空につながる山の向こうから、
今にも月が顔を出すのではないかと思いました。一枚の絵のような景色の中で水鳥だけが、音もなく
すべるように泳いでいます。
おじいさんは、たかしに言いました。
「どうだい、ここの景色は？」
「うん、山も川も・・・。」
たかしは、そう言いかけて、カメラを手に持ったまま、シャッターをおさず『待月』の景色をじっ
と見つめていました。

※ 「待月」は、広島県立美術館にて所蔵

【参考文献】

奥田元宋・小由女美術館（編・発行）「受け継がれる画家の魂 川合玉堂・児玉希望・奥田元宋」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

身近な自然の景色に対する主人公の気持ちの変化を中心にした展開
～ワークシートを話し合い活動に生かした指導～

（ア）主題名 身近な自然の美しさ 3－（3）

（イ）ねらい 地域の自然に関心がもてないたかしが、地元出身の画家、奥田元宋の絵『待月』の
モデルとなった景色に感動する気持ちを通して、身近な自然の美しさに目を向け、素
直に感動する心情を育てる。

（ウ）資料名 「待月」

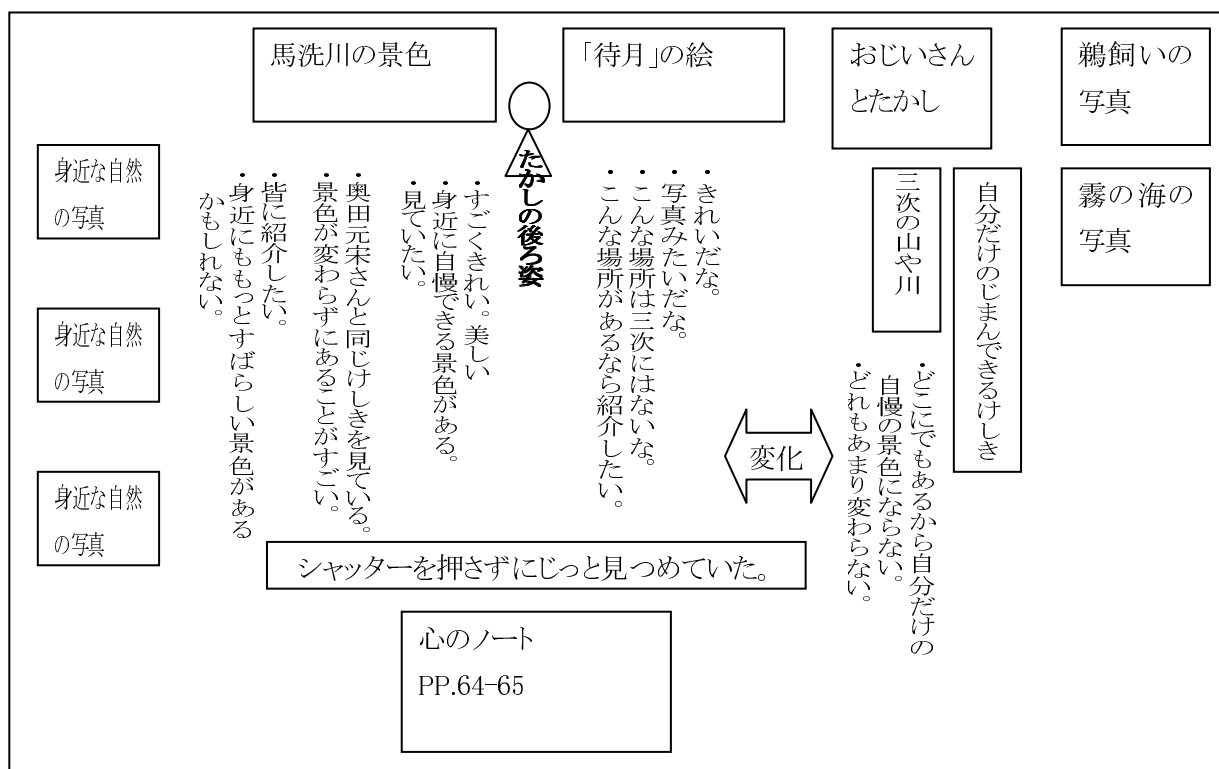
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 三次の景色を思い起こす。	○ 三次で知っている景色は、どんな景色ですか。	○ 校外活動での体験と関連付けて、三次の景色を思い起こさせる。
展開	2 資料を読んで考える。 ○ たかしは、三次の自然をどのように感じているか考える。 ○ 美術館で「待月」を観た時の気持ちを考える。 ○ カメラのシャッターを押さずに景色を見つめた理由を考える。	○ たかしは、三次の山や川をどのように思っているでしょう。 ・どこにでもあるから自分だけの自慢の景色にならない。 ・どれもあまり変わらない。 ○ たかしは、美術館で「待月」を観てどう思ったでしょう。 ・きれいだな。 ・写真みたいだな。 ・こんな場所は三次にはないな。 ・こんな場所があるなら紹介したい。 ◎ 「山も川も・・・。」と言いかけたたかしは、なぜ、カメラのシャッターを押さずに景色を見つめたのでしょうか。 ・三次にもこんなきれいな場所があったんだ。 ・いつも見ているのに気がつかなかった。 ・すぐにカメラで撮るのはもったいない。 ・ずっと見ていたい。 ・絵と重なってきれいだ。 ・月が出る頃みてみたい。	○ はじめにたかしが、三次の山や川をどう感じているかをとらえさせる。 ○ 資料提示は、「受け継がれる画家の魂 川合玉堂・児玉希望・奥田元宋」を見せながら行い、感想を自由に発表させる。 ○ 美術館で絵をみた感想を発表させる。 ○ 「待月」の絵と同じような景色を観た感想を発表させる。 ○ カメラのシャッターを押すのを忘れてみつめ続けた理由をワークシートに記入させる。 ○ ワークシートの内容を話し合い活動で高め合えるように新たな気づき等を発表しあう。 ☆ 児童相互の交流を通して、自己の道徳的なものの見方や考え方を広げたり、深めたりすることができたか。 ○ 身近な自然の写真を提示し、身の周りの自然の美しさに目を向けさせる。
終末	3 自分の生活を振り返る。	○ 身の回りにある自然で美しいと思った景色はありませんか。 ・草花や校舎の写真 ・夕焼けなどの写真	○ 「美しい自然は、あなたの心も美しくします。」の言葉をメッセージのように語り聞かせる。
終末	4 心のノートの言葉を聞く。	○ 心のノートに書かれているメッセージを読みます。	○ 「美しい自然は、あなたの心も美しくします。」の言葉をメッセージのように語り聞かせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

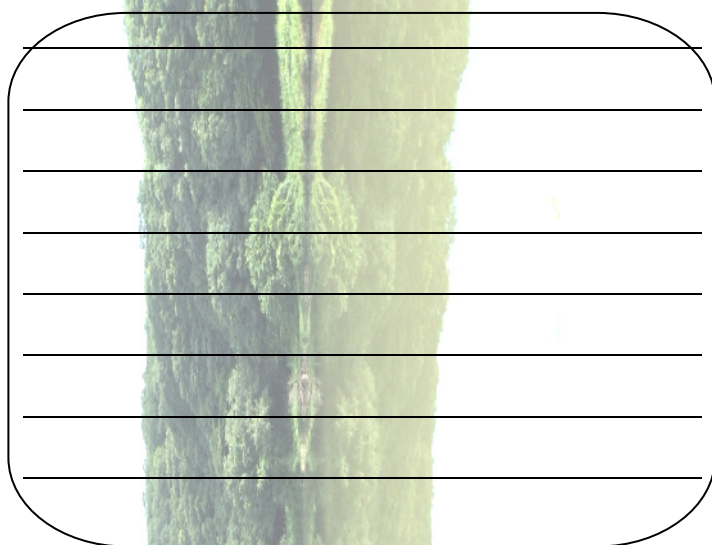
ポイントとなる場面絵や言葉の短冊を貼り、話の流れを視覚的に理解させる。また、たかしの心情が変化していることを矢印で示し、身近な自然の美しさに気付いていく心情の変化をとらえさせる。中心場面では、奥田元宋画伯の「待月」の絵とモデルとなった景色の写真を並べて掲示し、主人公と同じ目線で見ているような雰囲気をもたせる。そのため、見ている主人公の後姿を場面絵として使い、主人公の表情を自由に想像できるようにする。

中心発問の児童の発言を「感動・美しさ」や「時間や人とのつながり」、「伝えていきたいと思ったり見つけてみたいと思ったりする気持ちの広がり」の三つの観点で意図的に分類して板書する。

「待月」^{たいげつ}

名前

「山も川も・・・。」と言いかけたばかりは、なぜかスリムシャッ
ターを抱えずに景色を眺めていたのだじゃい。



めがね

金田の背腰に掛つて寝てたじろやむにのりいんろりやを轉
かせよう。



(2) 活用のポイント

本資料は、三次出身の奥田元宋画伯の作品「待月」とそのモデルとなった景色、それぞれの美しさや重ね合わせて観た美しさに感動する主人公を通して、身近な自然の美しさに気付く、素直に感動する心を育むものである。

活用のポイントとして、主人公の心情の変容を共感的にとらえさせることで、児童の心に訴え、新しい発見があるようにした。また、主人公の内的な変容を外的な言動によって描くことで、多様な考えが引き出せるように工夫した。

ア 発問の工夫

資料全体を通し、祖父の言動をキーワードとして、発問構成をしている。中心発問では主人公の心情の変容を共感的に考えさせたい。

イ 話し合いの工夫

考えを素直に表現したワークシートの内容を話し合い活動に生かす。意見の交流を通して他者の多様な考えに気付かせると共に自己の道徳的価値の自覚の深化を図りたい。

ウ 資料提示の工夫

優れた美術作品と景色の写真を対比させて提示し、資料の主人公と同じ視線で見ているかのように仕組み、共感させる。また、内省化では、身近な自然の美しさを写真で提示し、心のノート P.65 の詩を読みながら、掲示することで心に残る終末につなげていく。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

1つ目の基本発問は、資料前段で祖父が、「三次の山や川もいいんじゃないか。」と尋ねる場面を中心に、主人公が三次の身近な自然をどのようにとらえているかを考えさせた。児童は、

- ・山や川はどこも同じだと思っている。
- ・自分だけの自慢にならないから嫌だ。

など、身近な自然の美しさに気付いていない主人公の気持ちをとらえることができた。さらに祖父が、川の美しさを取り上げ、主人公に促した際の主人公の態度は、その思いの強調であり、基本発問で十分な考えが出なかった場合、補助発問として、この場面を活用できるように設定してある。

2つ目の基本発問は、美術館で「待月」の絵を観て、主人公がどのように思うかを問うものである。児童は、この発問に

- ・きれいだなあ。
- ・写真のようだ。
- ・こんな場所が三次にもあるといいなあ。

と、いうように絵に対する素直な感想と共に三次にもこのような景色があつて欲しいと願う主人公の気持ちを感じ取ることができた。

中心発問では、資料前段の祖父の「ただ写真に撮るだけじゃあ・・・。」という言葉キーワードとして活用して、「たかしが、『山も川も・・・。』とつぶやいて、カメラのシャッターを押さずに景色を見つめたのはなぜでしょう。」とした。この発問は、主人公の外的な言動から内的な心情について、多様な考えをもつことができることをねらいとした。また、考えにくい児童に対して、「山も川も・・・。」の後、何を言おうとしたのかという補助発問をした。

この発問において、児童は、

- | | | |
|-----|---|-----------------------------------|
| 美しい | { | ・きれいだなあ。すぐに写真に撮るのはもったいない。 |
| | | ・この景色をずっと見ていたい。 |
| | | ・山と川ってこんなにきれいだったんだ。 |
| 気付き | { | ・三次にこんなきれいな場所があつたんだ。 |
| | | ・今まで気がつかなかった。どうしてこの場所を選ばなかったんだろう。 |
| | | ・絵を見て、この景色をみたら自然は美しいと感じる。 |
| 広がり | { | ・自分の身近な場所を見て、もっときれいな場所をたくさん見つけよう。 |
| | | ・このままの自然を大切にしていこう。 |

など多様な考えをもつことができた。

イ 話し合いの工夫

話し合い活動は、中心発問のワークシートの内容を生かして行った。

ワークシートには、

- ・写真に残しただけじゃあ、みんなに思いが伝わらないかもしれないな。山も川もなかったらきれいじゃないし、美しくない。やっぱり自然は大切なんだな。

・あの絵のように月がちゅっと出てくる時まで
まってみたい。

など、ただ「きれいだから。」という思いだけで
ない多様な考えを素直に表現できていた。

このワークシートを元に、自分の考えを交流す
る話し合い活動において、児童は、他者のより高い
価値や多様な考えに触れることはできた。意見を
分類したり、先の発問で発言内容の板書に書き足
したりしながら、自分では気付かなかった思いや
自分とは違う思いに気付かせて、話し合いを深めた。

その中で、「写真をとるのをがまんした。」とい
う意見の児童は、「どうして我慢したのかうまく
言えなかったけど、〇〇君の意見を聞いて、ぼく
もすぐに写真を撮るのはもったいない、しばらく
見ていたい。と思ったのだと気付きました。」と
いう意見や「私は、〇〇さんの意見を聞いて、こ
の場所のことしか考えていなかったけど、身近に
もきれいな場所があることに気付き、もっと周り
をよく見てみようと思いました。」など自分の意
見を深めて言い換えたり、自分の意見に付け足し
たりしながら、道徳的価値の補充、深化、統合を
行うことができた。

授業後の振り返りでは、

・奥田元宋さんが描いた頃と変わってない昔か
ら伝わっていることが心に残った。
・奥田元宋さんと同じ景色をみているのはすご
いと思った。

といった時間的な流れの中でこの景色の美しさ
を感じることもできていた。

ウ 資料提示の工夫

場面絵を黒板に提示しながら、資料を読み進め
ることで、児童は、資料内容をより理解するこ
とができた。

主人公が、美術館で絵を見る場面では、奥田元
宋・小由女美術館発行の本に掲載されている美術
作品を見せながら、自由に感想を言わせた。「き
れい。」「前に見たけど、この絵はすごく大きかっ
たよ。」と友達と話しながら、資料の主人公の気
持ちを共感的にとらえさせることができた。

その結果、授業後も児童は、「画家の奥田元宋
さんが描いた絵は、とてもきれいだった。」

「写真かと思うぐらいきれいだった。」「美術館で
もう一度見てみたい。」といった感想をもち、美
術作品や地域の優れた芸術家にも目を向けよう
とする意欲をもつことができた。

二つの景色を重ね合わせる場面では、児童が同
じ視線で見ているように主人公を後ろ向きで提
示した。主人公の表情から想像する固定概念にと
わられないように配慮したことで、児童の意見を
「美しい」「新たな気付き」「広がり」といった思
いに広げることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

総合的な学習の時間において、1学期に、校区を
中心に地域の特徴や自然に目を向けて、それぞれの
地域のよさを見つけるなどの課題解決的な学習を
行っている。また、その中で地域の特産物であるぶ
どう作りも行っている。これらの学習で、自然に直
接触れたり、見たりする活動の充実が重要である。
また、より広い地域に目を向けさせたりするために、
長期の夏季休業において、市内の主な自然や公共物
などに出会わせるような課題を提示しておくよう
声をかけておいた。

事後活動においては、2学期に収穫を迎えるぶど
う作りの活動で、より自然の厳しさや美しさを身近
に感じることができる。このような学習の過程で、
児童が美しいと思った景色や自然物を写真に残し、
掲示していくことが効果的だと考える。

(5) 心のノートの活用

身近な自然の美しさを実感できる写真を提示し、
児童がその余韻に浸っている終末で「心のノート」
を活用した。「心のノート」PP.64-65 を視覚的に提
示しながら、書かれているメッセージを静かに読み
語り、授業を終えることで、最後の「美しい自然は、
あなたの心も美しくします。」という言葉の意味を
自然に伝えることができ、児童も素直に受け止める
ことができた。

教材活用例(3) 「時をおよぐクジラ」

〔小学校中学年 主題：自然と共に生きる喜び 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—ショウバラクジラーについて〉

庄原市（中国山地）の西城川河川敷から発見された、1600 万年前のクジラの化石である。平成 20 年に新種と認定され、発見者の名前や地名が学名となっている。現在、山の奥である場所が、数百万年前は、海の底であったことから、自然の不思議さや地球の偉大な変化に感動させられるものである。



新生代三期 (1600万年前)	庄原一帯は、拡大する日本海の中にあり、多数の海の生き物が生息していた。
新生代四期 (1000万年前)	この頃、現在の日本列島の地形となった。
昭和初め頃	貝や魚の化石が発見され、地質学調査が始まる。
昭和56年 (1981年)	山岡隆信さんらが、クジラ三種を発見する。仮名「ショウバラクジラ」となる。
平成8年 (1996年)	庄原化石集談会が創設される。
平成20年	山岡さんらが昭和56年に発見したクジラが新種とされ、「ヤマオカクジラ」などと命名される。

ショウバラクジラの歴史

(イ) 4コマ絵

史実を基に、クジラを主人公としたファンタジックな資料にした。悠久の時の流れにおける自然の素晴らしさ、地球の雄大な変化に感動する場面を中心場面とし、4場面構成とした。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	数百万年前、自然豊かな海で、友達や家族、いろいろな生き物と生きるクジラのショウちゃん。ショウちゃんは、この自然豊かな海が大好きだった。	ある時、海の水がだんだんと引いていき、海の生き物たちが一つまた一つと死んでいく。家族、友だちも死に、死の海となっていく様子を悲しみ、恐れるショウちゃん。そして、ついにショウちゃんの命も消えていく……。	化石となり、土の中で眠るショウちゃん。そして、数百万年の眠りから覚めた時、そこに広がる光景は、動物たちが走り回り、緑の木々が生き茂る自然豊かな森であった。その様子に驚き、感動するショウちゃん。	自然豊かな海が死の海へ……、しかし、悠久の時の流れの中で、自然豊かな森へと変貌を遂げたことに驚き、自然の偉大さに感動するショウちゃん。自然があるということに感謝しながら、喜びをかみしめて、森を飛び回るショウちゃんであった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今、自分たちが住んでいる中国山地から海の生き物であるクジラの化石が発見されるという事実は、子どもたちにとって、それだけで驚きを与え、自然の雄大な変化を感じ、素直に感動できるものである。地域教材のよさを生かしながら、その感動をストレートに感じることにできる設定にした。

また、低中学年の児童をイメージし、主人公に同化し、共感しながら考えることができるようにするため、クジラを擬人化し、主人公とした。基本的な設定は、事実に基づくものとしたが、より子どもを話の中に引き込ませるため、ファンタジックな世界として描いていった。

中心場面（山場）においては、死の世界になったと思っていた海が、自然豊かな森に生まれ変わった場面での主人公の喜びを表現した。その際、「大きな声で呼びかけた…」「あたたかい目で・・・見続けた」のように、行動を通して、心の動きを表現することに留意した。

補助的な資料として、場面絵（イラスト）も大きな役割を担っている。温かいタッチと色彩で描き、ファンタジックな内容にマッチするものとした。また、自然豊かな海と自然豊かな森を対比させるために、構図を同じものとするなど、視覚的にも、子どもの心に響かせるものとなっている。



【心に響くちょっといいはなし】

前述の「ショウバラクジラの歴史」の年表にも記載しているが、このショウバラクジラを発見した一人が、題材となった場所を校区とする小学校の卒業生である山岡隆信氏である。山岡さんは、小学校在学時から化石発掘に取り組み、化石少年と呼ばれるようになる。時には、周りの冷たい視線に合い、挫折を経験しながらも、大きな発見をしたいという夢を貫き、あきらめずに化石採取を続ける。そして、中学生の時に恩師の広瀬先生とともに、西城川の河原から、クジラの化石を数点発掘する。進学という人生の節目でも、広瀬先生の言葉を信じ、地元での化石発掘に一生をかけることを誓い、以後数十年、化石を掘り続けてきた人物である。中学生の時に見つけたクジラの化石が新種であることが、27年の研究の末に明らかになり、その功績を称え、その一頭に「ヤマオカクジラ」という学名が付けられることとなった。



山岡隆信氏

以上の話を、「時をおよぐクジラ」の外伝的なものとして、道徳資料「化石少年」（主題「やり遂げる思い」 1－（2）努力）として教材化している。「時をおよぐクジラ」と共に行うことで、相乗効果が期待される。

「時をおよぐクジラ」

むかしむかしのそのまたむかし、人間がこのちきゅう上にあらわれる前のお話です。そのころは、このちきゅうはしぜんゆたかで、どうぶつたちや魚たちの楽園でした。

クジラのショウちゃんは、ゆたかな海で生まれ、大すきなお父さん、お母さん、友だち、そして、多くのなかまとともに、楽しくくらしていました。

ショウちゃんは、このしぜんゆたかな海が大すきで、いつもおさん歩に出かけていました。数千びきの小魚のむれ、見たことのないようなふしぎな形をした生きもの、とってもきれいでうっとりするような魚たち、海のそこでゆらめく数え切れないほどの海草、そのたくさんの生きものとの出会いが、ショウちゃんにとって何よりのよろこびでした。

海のおさん歩からもどったショウちゃんは、お友だちのノブちゃんと出会いました。

「ショウちゃん、また海のおさん歩に行っていたの。」

「うん、だってぼく、いろいろなお魚さんたちにあったり、お話ししたりするのが楽しいんだもん。」

「本当にショウちゃんは、この海が大すきなね。」

「ノブちゃんもいっしょに行こうよ。本当にたくさんの生きものが、この海にはいるんだよ。」

「うん、行こうか。じつは、わたしも、この海が大すきなんだ。」

二人とも、この海に生まれてきたことをしあわせに思っていました。



ところが、このしぜんゆたかな海に大へんなことがおこったのです。だんだんと海の水が引きはじめ、海草はひ上がり、多くの魚がいきたえていったのです。

「ぼくの大すきだった海が……。いのちいっぱい海が……。」

だけどショウちゃんにはどうすることもできませんでした。一つ一つきえていくいのちを見まもることしかできなかったのです。

そして、とうとうお友だちのノブちゃんも、お母さんもお父さんもみんないなくなってしまう、ショウちゃんも、水がなくなった海のそこで、一人ぼっちで、よこたわってしまいました。

「このまま……この海も、しのせかいになっちゃうのかな……。」

「いやだ。そんなこと……、そんなせかいなんて……。」

ショウちゃんの中から、なみだが一つぶこぼれおち、一つぶのたねの上におちました。そして、そのたねから出てきた小さなめを見ながら、とうとうショウ



ちゃんも力つきていきました。



それから、長い長い時がすぎていきました。ショウちゃんはか石となって、岩の中でねむりつづけました。

どれぐらいの時がたったのでしょうか。ねむりつづけるショウちゃんに、小さなものが聞こえてきました。

「チュン」「チュンチュンチュン」「ピ・ピ・ピ・ピー」「サヤサヤサヤ・・・」
「ん……。何の音だろう。」

ショウちゃんが目をあけると、そこには、一人の男の子が立っていました。
「クジラくん見いーつけた。」

ショウちゃんは、か石をほりに来た一人の男の子にはっ見されたのです。



そして、長いねむりからさめたショウちゃんの目の前には、思いもかけなかった光けいが広がっていました。そこは、たくさんの生きものにかこまれた緑ゆたかな森だったのです。長い年月がたって、



海の生きものたちが土にかえり、そしてえいようとなり、新しいのちに生まれかわったのです。ひ上がった海に草がはえ木がしげり、そして、たくさんの虫や鳥、どうぶつたちが生き生きとこの森をかけ回るようになったのです。

「あのしんだ海が、こんなゆたかな森に・・・。」

「草がはえている。木がしげっている。鳥がとんでいる。どうぶつたちがかけ回っている。歌声が聞こえる。わらい声が聞こえる。みんな生きている。みんな生きているんだ。」

「ノブちゃん、お母さん、お父さん、見てごらん。ぼくたちの海が、こんなみどりゆたかで、どうぶついっぱい森に生まれかわったんだよ。」

ショウちゃんは、とってもとってもうれしくなって、今この森をかけ回っているどうぶつや草や木たちに、そしてむかしの海のなかまたちにとどくように、大きな声でよびかけました。

「ありがとう、みんな。」

そして、あたたかい目で、いつまでもこの森を見つけていました。

【参考文献】

古川義雄・山岡隆信著（2002年（平成14年））「備北層群」 庄原化石集談会

庄原市自然科学博物館（2008年）「第61回特別展『備北層群産出のクジラ類化石』展示解説」絶版

自然の雄大な変化を、感動をもって感じることできる展開A
～ ファンタジックな大型絵本による資料提示を生かした指導 ～

(ア) 主題名 自然と共に生きる喜び 3－(2)

(イ) ねらい 死んだと思った海が、自然あふれる森に生まれ変わったことを知ったクジラの気持ちに共感させることにより、自然の不思議さ、雄大な変化に感動し、いまここにある自然を大切にしようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「時をおよぐクジラ」

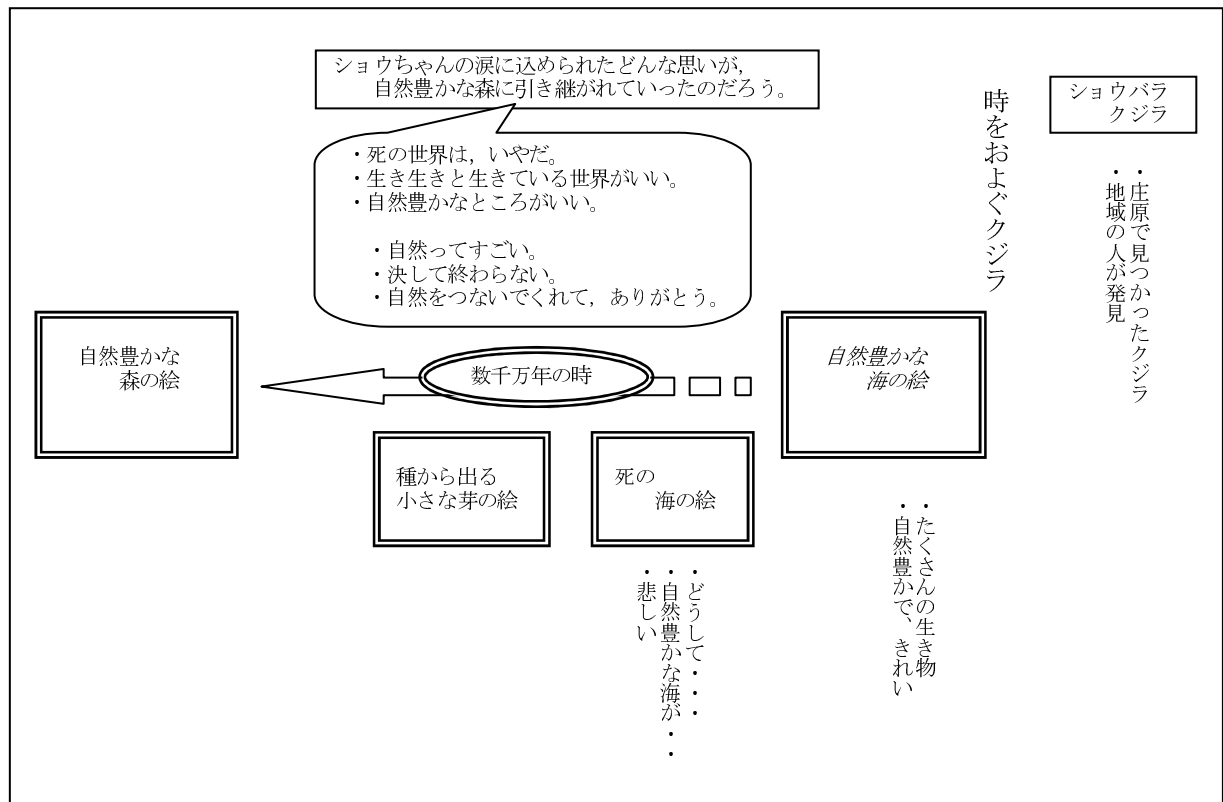
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 ショウバラクジラについて知る。	○ ショウバラクジラって知っていますか。 ・ おじいちゃんに聞いたことがある。 ・ 庄原に住んでいたクジラのこと。 ・ 地域の人が見つけたクジラの化石。	○ 地域の話であることを全員のものとし、資料に引き込ませる。
展開	2 主人公の気持ちを捉える。	○ ショウちゃんは、この海のことをどうして好きなのでしょう。 ・ たくさんの生き物がいるから。 ・ 自然豊かで、きれいなところだから。 ○ 涙をこぼしながら、ショウちゃんはどんなことを考えていたでしょう。 ・ どうしてこんなことになったんだろう。自然豊かなこの海が好きだったのに。 ・ みんながいなくなった。一人ぼっちになって悲しい。 ・ ぼくも、死んでしまうんだ。死の海になってしまうんだ。	○ 大型絵本で、資料提示し、絵からも、この海の素晴らしさを感じさせていく。 ○ 児童の経験も振り返らせながら、自然がなくなることの悲しさに共感させる。
	3 主人公の気持ちを考える。	◎ ショウちゃんの涙に込められたどんな思いが、自然豊かな森に引き継がれていったのだろう。 ・ 死の世界は、いやだ。 ・ みんなが生き生きと生きている世界がいい。 ・ 自然豊かなところに生まれ変わってほしい。 (補) 生まれ変わった森を見て、ショウちゃんは、どんな気持ちになってきたでしょう。 ・ どうしてこんな不思議なことが起こったんだろう。すごいな。 ・ 海は死んだけど、こんな命いっぱい森に生まれ変わったんだ。 ・ ぼくの仲間も死んだけど、この森の動物たちに引き継がれているんだ。 ・ 自然ってすごいな。決して終わることはないんだ。 ・ 豊かな自然をつないでくれて、ありがとう。	○ ワークシートに書かせ、一人一人に自分の考えをもたせるとともに、意図的指名に生かす。 ○ 机間指導の中で、考えにくい児童へ補助的な声かけを行う。 ○ 種に落ちる涙から、自然のつながりをイメージさせていく。 ☆ 大型絵本による資料提示は、児童の理解を容易にし、クジラの気持ちへの共感や自然に対する感動を促すことができたか。
	4 自己の生活につなげる。	○ 自然がある喜びを感じたことはありませんか。 ・ きれいな虹を見て、うれしくなった。 ・ 緑の葉っぱを見て、生きてるんだなと感じた。 ・ 鳥の声を聞いて、気持ちよくなった。	○ 今までの経験、体験を振り返らせ、身の回りにある自然の喜びに気付かせる。
終末	5 自然のよさを感じる。	○ この庄原の自然をみんなで感じましょう。「美しい庄原の自然」	○ 美しい庄原の自然の写真をBGMと共にスライドショーで流すことにより、自然があることの喜びを感じさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

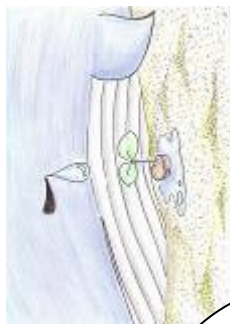
「自然豊かな海」と「自然豊かな森」を対称的に構成することにより、自然のつながり、再生を感じさせることを意図とした。また、数百万年の時の流れを長い矢印で表すことにより、視覚的にも時の長さを感じさせていくことができる。そして、板書の中央に、中心発問を書くことにより、自然の豊かさ、喪失、再生、全てがつながりの中にあり、その雄大な変化を丸ごと受け止めることの大切さ、それこそが自然の不思議さ、素晴らしさなのだという意識させるように工夫した。

世界をめぐくしん

／ ()

()

- ◎ ショウちゃんのなみだにこめられたような感じが、自然ゆたかな森に引きつがれていったのだった。



自然の再生の偉大さから、生命の不思議さと連続性を感じることもできる**展開B**

～ 導入、展開、終末の連動性を生かした指導 ～

(ア) 主題名 命のつながり 3－(1)

(イ) ねらい 死んだと思った海が、命あふれる森に生まれ変わったことを知ったクジラの気持ちに共感させることにより、生命のつながり、生きることの喜びを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「時をおよぐクジラ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 「生命」に対する課題意識をもつ。	○ 地球からみんなに手紙をもらいました。 「私(地球)の上で暮らす者たちが、あまりにも命を粗末にするので、悲しい。みんなちゃんと『生きている』かい？」 ・どうして、みんなちゃんと生きているよ。 ・「生きる」ってどういうことだろう。	○ ファンタジックな世界に入り込めるように、地球からの手紙を読むという設定から入る。また、『生きる』ということに対する課題意識をもって、資料に入れるようにする。
展開	2 主人公の気持ちを捉える。	○ ショウちゃんは、この海のことがどうして好きなのでしょう。 ・たくさんの生き物がいるから。 ・友だちや家族と楽しく暮らしているから。 ○ 涙をこぼしながら、ショウちゃんはどんなことを考えていたでしょう。 ・どうしてこんなことになったんだろう。この海が好きだったのに。 ・みんながいなくなった。一人ぼっちになって悲しい。 ・ぼくも、死んでしまうんだ。生きていてもしょうがない。	○ 紙芝居形式で、資料提示し、絵からも、この海の素晴らしさを感じさせていく。 ○ 児童の経験も振り返らせながら、死の悲しみに共感させる。 (子どもの実態により配慮が必要)
	3 主人公の気持ちを考える。	◎ ショウちゃんの涙に込められたどんな思いが、命豊かな森に引き継がれていったのだろう。 ・死の世界は、いやだ。 ・みんなが生き生きと生きている世界がいい。 ・この命をつないでいきたい。 (補) 生まれ変わった森を見て、ショウちゃんは、どんな気持ちになってきたでしょう。 ・どうしてこんな不思議なことが起こったんだろう。すごいな。 ・海は死んだけど、こんな命いっぱい森に生まれ変わったんだ。 ・ぼくの仲間も死んだけど、この森の動物たちに引き継がれているんだ。 ・命ってすごいな。決して終わることはないんだ。 ・命をつないでくれて、ありがとう。	○ ワークシートに書かせ、一人一人に自分の考えをもたせるとともに、意図的指名に生かす。 ○ 机間指導の中で、考えにくい児童へ補助的な声かけを行う。 ○ 種に落ちる涙から、命のつながりをイメージさせていく。 ☆ クジラの気持ちへの共感を通して、導入における課題意識を自分なりに発展させていくことができたか。
	4 自己の生活につなげる。	○ 命を育んでくれるこの地球に、みんなもありがとうの気持ちを伝えてみよう。 ・ぼくたちを生んでくれて、ありがとう。 ・これからも命を大切にしていこうよ。 ・これからもずっとずっとがんばって生きていこうよ。	○ 生きていることの感謝の気持ちを表現させることで、生きていることの喜びを感じさせる。
終末	5 命について考える。	○ みんなで声を合わせて、「ありがとう」と言ってみよう。 「地球のメッセージ…生命は途切れることなく受け継がれていく。生きる喜びを感じてほしい。」	○ 子どもたちの感謝の声に対する地球からの返事のメッセージ(録音)とすることにより、余韻をもたせて終わる。

(2) 活用のポイント

自然の雄大な変化に気づき、感動をストレートに感じさせることが、大きなポイントである。そのためには、主人公に同化しながら、共感的に考えさせていくことが有効である。手立てとしては、共感的な発問を仕組んでいたり、資料提示の工夫により、ファンタジックな世界に引き込ませていたりすることが考えられる。また、自分たちの生活に密接に関わっていることを、地域教材のよさを生かしながら感じさせたり、板書の工夫により、自然の悠久の流れを視覚的に感じさせたりすることも有効である。

ア 発問の工夫

展開中での4つの発問を、全て「今の自然」に対する思いを考えさせるものにしていく。そのことにより、豊かな自然がある喜び、それが壊れていく悲しみ、そして再び豊かな自然が蘇る感動を、主人公のクジラと同化しながら共感させていくことができる。

イ 資料提示の工夫

資料提示を、主人公の表情と豊かな情景で表された大型絵本で行っていく。そのことにより、ファンタジックな世界に浸りながら、主人公のクジラに共感できるようになり、自然への思いを素直に表現させていくことができる。

ウ 導入の工夫

自分たちの地域の話（地域教材）ということを導入で押さえる。そのことにより、今自分たちが立っているこの場所が、数百万年前は、自然豊かな海だったことに気付かせることにより、児童は、自然の雄大な変化、不思議さ、素晴らしさを実感できるものになる。

エ 板書を生かす工夫

「自然豊かな海」⇒「死の海」⇒「自然豊かな森」の連続性が分かり、また、「自然豊かな海」と「自然豊かな森」を対比させる板書にしていく。そのことにより、視覚的にも、自然の連続性や普遍性を感じ取らせることができる。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開全体の中で、「動物がいて、鳥がいてよかった。緑ゆたかでもよかった。」「ゆたかなしぜんをありがとう。」という反応が多かった。自然がある喜び、生き物がある喜びを主人公に同化して考えることができ、命あふれる自然のよさと不思議さに感動することができた。

イ 資料提示の工夫

現実的でないファンタジーの世界であるが、温かく親しみやすいイラストを大型絵本にし、読み聞かせ風に提示していくことにより、資料に自然に入っていく様子が見られた。また、擬人化された動物の絵などにより、主人公のクジラに同化しながら、考えていく様子が見られた。

ウ 導入の工夫

導入では、「えー、庄原にクジラがいたの。」「ここが海だったの。」と実感として不思議さを素直に感じることもできた。また、「化石を見に行きたい。」「わたしも見つけてみたい。」などと、生活につなげて考えていくことができ、自然の雄大な変化をより実感していくことができた。

エ 板書を生かす工夫

展開後段では、「しぜんゆたかな海にもどってほしいというショウちゃんのおいが、しぜんゆたかな森になった。」などと考えることができた。生命あふれる自然は、たくさんの命や自然が生まれ変わり連続していることを感じさせることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科「わたしたちの町はどんなまち」という単元の中で、地域の良さを見つける活動をするることにより、ショウバラクジラ発掘地のことも押さえておいた。そのことにより、地域の話である、本当の話であるということ意識して、資料に入っていくことができた。

「命を見つめて」という生き物のくらしを考える総合的な学習の時間の中の単元や「生きもののようす」という理科の単元と連動させていくことにより、

より実感をもって、自然の素晴らしさを感じさせていくことができる。

道徳の時間において、「化石少年」という同じ素材を題材にした資料とつなげていくことにより、多様な道徳的価値とからませていくことができる。

（５）心のノートの活用

「心のノート」P. 54 の自然への愛着を感じる詩を拡大コピーし、教室に掲示しておく。子どもの気付きがあれば、それを全体にも投げかけ、豊かな心を養っていく。

理科「生きもののようす」の単元の中で、一年間を通して、植物や動物の生きている姿を感じさせる。その学習の初めに、「心のノート」PP. 60-61 を活用し、生きている姿を感じたことを記入させることにより、自分たちと同じように生きている、共に生きている生き物への愛着を深めさせる。

自由に心のノートを読んだり書いたりできる月一回の朝会を使い、学級の児童全員に「心のノート」PP. 62-63 の内容について考えさせる。日常生活で感じる自然や生き物への思いを振り返らせる。また、一人一人の思いを交流することにより、動植物愛護に対する多様な見方、考え方にふれさせる。



教材活用例(4) 「モリアオガエルを守る」

〔小学校高学年 主題：自然を大切に 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—モリアオガエル—について〉

モリアオガエルは、日本固有のカエルで、水面上に
せり出した木の枝などに泡状の卵塊を産み、卵塊の中
で孵化したオタマジャクシは、雨でとけ崩れる卵塊と
ともに水面へ落下していく。

しかし、近年モリアオガエルは、各地でその数が減
り、絶滅危惧種に指定されている。その理由として、
生息地の森林などに人の手が入り、環境が変化し、水
面上に木の枝がせり出すような湖沼が少なくなったた
めであると言われている。

神石高原町の上豊松では、モリアオガエルを保護す
ることで地域の自然環境を守る活動が行われている。



モリアオガエルと卵塊

(イ) 4コマ絵

自分の命が残り少ないと知りながらも、モリアオガエルを守り、自然保護の必要性を伝えよう
とした井上末枝さんの生き方や考え方が感じられるように4つの場面で構成した。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	平成13年6月、上豊松の井上末枝さんが、田んぼのそばの草むらにソフトボール大の泡状のものを2個見つけた。モリアオガエルの卵ではないかと思った。	次の年の6月、3個の卵塊を発見した。中学校の先生にみてもらい、モリアオガエルの卵であることを確認した。その後、井上さんは、毎日観察し、卵のまわりに水たまりを確保した。 地域の人も協力して、自然保護を行い、地域の環境が少しよくなったのを実感した。	井上さんは、以前手術して治したはずの病気が再発し、あと数年生きられるかどうかという状況になった。 それでも井上さんは、自分のつとめとして、モリアオガエルの保護活動をし続け、地域の子どもたちにも紹介した。 しかし、平成21年1月井上さんは、亡くなられた。	その後も、地域の人たちが協力して井上さん宅のモリアオガエルの世話や自然保護活動が続いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

井上さんは、もともと自然や動植物を大切にする人だったが、病気が再発して、自分の命が残り少ないと知ってからは、自分の命はもちろんのこと、身のまわりの小さな命も今まで以上に愛おしく感じ、残された時間の中で、モリアオガエルを一生懸命保護をされた。そうすることが自分が生きている証にもなっていった。また、地域の美しい自然を未来に残すために、身近な小さな動植物を守り育てることが必要であると子どもたちに伝えようとされた。かつての豊松村の広報に「小動物や人間にやさしい公害の少ない自然環境づくりに努力することは、今私たちに与えられた大切なつとめだと実感しております。」とその思いが記されている。子どもたちには、井上さんの生き方や思いを知り、これまで当たり前と思っていた地域の自然の美しさは普遍的なものでなく、保護していく必要があることを感じてほしいと考えた。

本校の高学年は、井上さん宅にモリアオガエルの見学に行っている。そのため、モリアオガエルが育つ自然条件などの知識がいくらかあり、モリアオガエルを守るために木の枝打ちや水たまりが確保されているのを実際に見ているので、この体験学習を想起させることで、場面の様子や状況が理解しやすいと考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

井上さんは、毎年、モリアオガエルの卵塊を見つけた最初の日からオタマジャクシが水たまりに落ちていく最後の日まで、その数を毎日3年間日記に書き記しておられた。

息子さんへの聞き取りでその日記を見せていただくと、毎日、田んぼごとの卵塊の数、合計など細かく書き込まれていた。この日記で毎年の卵塊の見られる時期や数の増減を比べておられたようだ。子どもたちが見学に来たことも毎年書かれていた。

また、日記には、自分の病気の治療のためにしたことも毎日書かれていて、病気を克服して生きようとされていた気持ちが伝わってきた。しかし、その日記の3年目は1月の半ばで終わっている。息子さんは、「この日記を使い始めたとき、自分の病気のことをすでに知っていた。せめて3年は生きようと目標にして頑張っていたのだろう。」と言われた。びっしり書き込まれた2年間とは対称的に3年目の日記は空白である。この空白を今後の地域の人や子どもたちの活動が埋めてくれることを願いたい。

ウ 資料全文

モリアオガエルを守る

モリアオガエルは、日本にしかないカエルで、水面上のせり出した木の枝などに泡で包まれた卵塊を産みつけます。一週間から二週間たつと、卵塊の中でふ化⁽¹⁾してオタマジャクシになって雨を待ち、雨で溶けくずれる泡とともに水面へ落下します。しかし、近年、モリアオガエルは、各地でその数が減っています。それは、生息地の里山を人間が開発してこわしたため、環境が変化し、水面上に木の枝がせり出すような湖沼が少なくなったからです。また、農薬の使用もその原因の一つです。

モリアオガエルは、絶滅危惧種⁽²⁾に指定されています。

上豊松の中間谷に住む井上未枝^{まつえ}さんは、身のまわりの動植物をとっても大切にする人でした。この辺りには、昔からモリアオガエルが生息していたのですが、昔に比べ、その姿を見ることも少なくなっていました。

「見た目は、昔と変わらんけど、この里山も水や空気がよごれて、モリアオガエルも住めん環境になってしまたんかなあ。」と井上さんは、さみしそうにつぶやきました。



そんなある日（平成13年6月）、井上さんは、田んぼのそばの草むらでソフトボールより少し大きい白い泡のかたまりを2個見つけました。（これはもしかしてモリアオガエルの卵では・・・）

次の年も同じような場所で、今度は三個の白い泡の固まりを発見しました。

そこで、中学校の理科の先生に相談し、見てもらいました。

「これは、確かにモリアオガエルの卵ですよ。」

と言われ、

「やっぱりそうじゃったんじゃ。まだモリアオガエルはこのあたりにいくらかおったんじゃ。昔の自然条件が残っていたんじゃ。よし、このまま放っておいたらいけん。守ってやらんと。」

と言って、急いで卵の下の水たまりを深くほって広げました。

卵塊を見つけた日から井上さんは、毎日観察をして、日記に卵塊の数を書き記しました。また、毎年、6月の中頃には、モリアオガエルが水たまりのちょうど上で卵を産めるように木の枝打ち⁽³⁾をしたり、モリアオガエルの天敵⁽⁴⁾であるヘビが近づかないようにしたりしました。



この地域の世話役である佐藤さんも、以前から地域の環境の変化に不安を抱いておられたので、そんな井上さんの様子を知り、

「みんなで里山の自然環境を守り育てようじゃないか。」

と地域の人に呼びかけました。

地域の人たちも賛同し、さっそくみんなで草刈りや溝のそうじなどを始めました。また、稲を育てるのに、きつい農薬でなく、安全で安心な物を使うようにしました。

すると、次の年、その地域で見られるホタルの数が増え、モリアオガエルの声も多く聞けるようになりました。佐藤さんは、うれしそうに、

「ホタルが増えたということは、川の水がきれいになったということじゃ。」

と言いました。井上さんは、

「この前、日記を見たら、前よりモリアオガエルの卵の数がぐんと増えた。こんな環境なら、私も長

生きできそうですわ。」
と笑顔で言いました。

しかし、それから何年か後、井上さんは、以前手術して治したはずの病気が再発してしまいました。医者からも無理をしないように言われましたが、井上さんは、山や川や田畑の世話を一生懸命に続けました。

その後、井上さんの病状は悪化し、あと数年生きられるかどうかという状態になり、自分の家のまわりの木の枝打ちや草刈りをする体力もなくなっていました。それでも、モリアオガエルの観察や世話は毎日欠かしませんでした。それどころか前にも増してモリアオガエルを守ることに一生懸命になりました。

井上さんは、佐藤さんたち地域の人々の協力を得て、モリアオガエルが卵を産む時期になると木の枝打ちをしたり、その下にみぞを作ったりしました。さらに、井上さんは、

「みなさんのこれからの勉強に役立てていただければ何よりです。」
と小学校の子どもたちに見学に来るよう知らせてくださり、佐藤さんといっしょに説明もしてくださいました。また、自宅の周辺に昔から生えていた山野草に名札をつけて、子どもたちに教えてくださいました。

「きれいでしょ。こんな花やモリアオガエルが毎年見られるように守っていかなとね・・・それが、わたしのつとめです。」

井上さんは、子どもたちに優しく語りかけました。

しかし、平成21年1月、モリアオガエルの保護・観察に努力された井上未枝さんは、その年のモリアオガエルの鳴き声を聞くことなく亡くなられました。

6月になると、小学校の子どもたちがモリアオガエルの見学にやって来ました。井上さんの姿はありませんが、その家の庭や森は地域の人たちの力を借りてきれいに草が刈られ、モリアオガエルの卵塊の下には、広い水たまりが確保されています。子どもたちが観察しやすいようにあぜ道まで作られていました。井上さんが大事に育てた山野草もさいています。

佐藤さんが、子どもたちにモリアオガエルについて説明してくださっているときのことです。井上さんの家の雨どいをふと見ると、大きなモリアオガエルが、今までに見たこともないほど美しい緑にかがやいていました。

【注】

- (1) 卵からかえること。すなわち、卵を産む生物の発生で、卵から幼体がでてくること。
- (2) 動植物のなかで、一個体も生存しなくなった状態を「絶滅」したといい、その恐れが最も大きな状態の種や亜種のこと。
- (3) 土地に生えているままの樹木の枯れ枝や生枝の一部を取り除くこと。
- (4) ある特定の種の動物の捕食者、寄生者として、それを殺したり増殖をはばむ動物のこと。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「つとめ」というキーワードに着目し、主人公の生き方について考える **展開A**
 ～ 体験活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 自然を大切に 3ー(2)

(イ) ねらい モリアオガエルを守る活動に努力された井上未枝さんの思いや生き方を考えることを通して、自然の美しさやもろさに気付き、地域の自然を大切に守ろうとする心情を培う。

(ウ) 資料名 「モリアオガエルを守る」

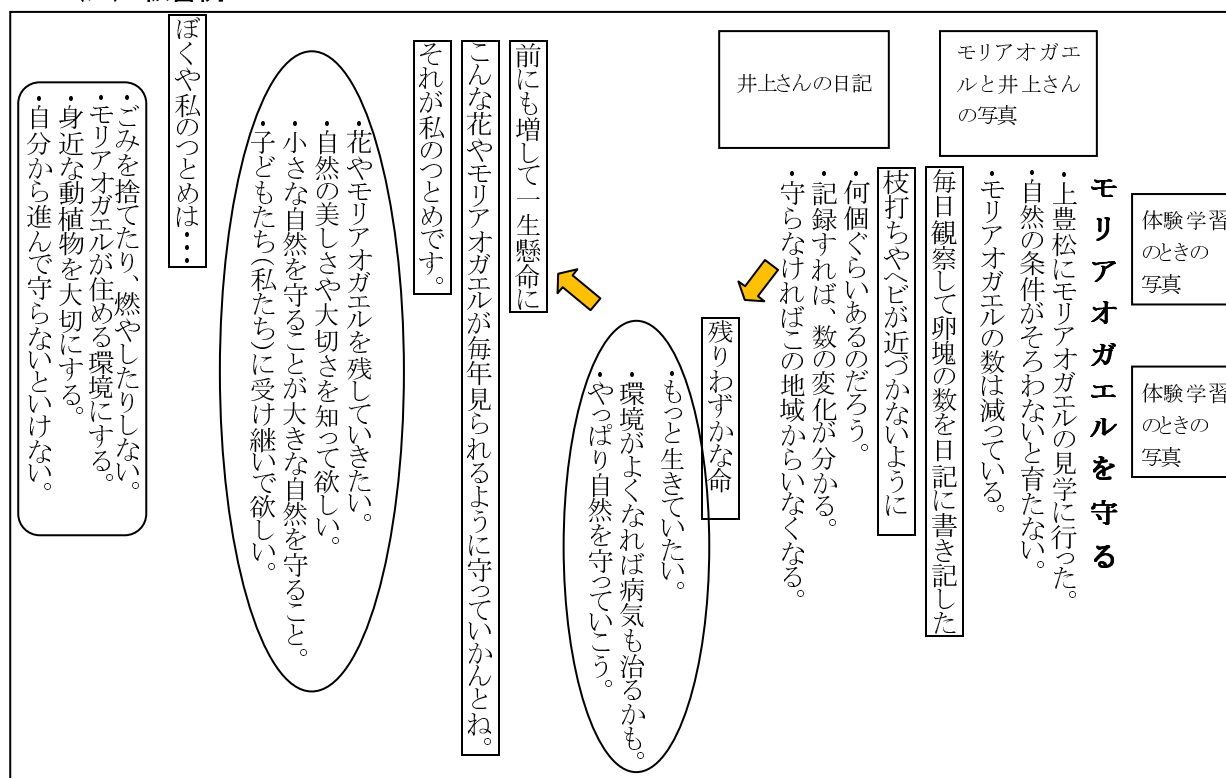
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 モリアオガエルの声を聞き、知っていることを出し合う。	○ モリアオガエルについてどんなことを知っていますか。 ・上豊松に見学に行った。 ・自然の条件がそろわないと育たない。	○ 昨年度の体験学習を想起させ、資料への方向付けをする。
展開	2 資料を聞いて考える。	○ 井上さんは、なぜ卵塊の数を日記につけたり、枝打ちやヘビが近づかないようにしたのでしょうか。 ・何個ぐらいあるか知りたいから。 ・記録すれば増えているか減っているか分かる。 ・モリアオガエルを守ろうと思った。 ○ 自分の命が残り少ないと知った井上さんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・もっと生きていたい。 ・残された時間で自分に何ができるだろう。 ・環境がよくなると病気も治るかもしれない。 ・やはりモリアオガエルや自然を守っていこう。 ◎ 井上さんはどんな思いから「私のつとめ」としてモリアオガエルを守り続けたのでしょうか。 ・花やカエルを毎年見られるようにしたい。 ・生きている限り自然保護を続けたい。 ・子どもたちに自然の美しさや大切さを伝え、知ってもらいたい。 ・今の自然をいつまでも残して欲しい。 ・小さな自然を守ることが大きな自然を守ることにつながることを伝えたい。 ・自然を守る活動を伝え、受け継いでもらいたい。	○ 井上さんが、毎日、卵の数を書き込んだ日記を提示し、モリアオガエルがこの地域から消えないように守ろうとしたことをおさえる。 ○ 自分に残された時間が短いと知り、自然を守る思いを強めたことをおさえる。 ○ 井上さんの話や田んぼの様子を想起させ、「つとめ」に込められた井上さんの思いを考えさせる。 ○ ワークシートに書く。 ○ 自然の美しさや保護の大切さを伝えたかったことをおさえる。 ☆ 体験活動で感じたことや考えたことを踏まえ、井上さんの思いにせまることができたか。
開	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分たちの「つとめ」は何か考えましょう。 ・ごみを捨てたり、燃やしたりしない。 ・モリアオガエルが住める環境にすること。 ・身近な動植物を大切にすること。 ・自然がいっぱいだからいいと思っていたけど、進んで守っていかないといけない。	○ 井上さんの思いを受け、自分と自然との関わりを振り返らせる。
終末	4 まとめをする。	○ 心のノート P.62 を読みましょう。 ○ 「きらり豊松」のビデオを視聴しましょう。	○ 自然はこわれるとともにには戻りにくいことを知らせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例



【板書の構成】

板書は、井上さんや児童の思いが視覚的にとらえられるようにする。そのためには、児童の発言を整理・分類して書くようにする。

自分の命が残り少ないと分かった場面では、黒板の低い位置に思いを書き、残された時間の中でモリアオガエルの保護活動に以前より一生懸命になる場面では、黒板の高い位置に思いを書き、矢印を使って心情の変化を表した。

自分の生活を振り返る場面では、資料から離れて自分自身に問いかけるので、児童の発言をこれまでの板書で使っていない色を使うなどして意識付けるようにする。

モリアオガエルを守る

年

井上さんはどんな思いから「わたしのつとめ」としてモリアオガエルを守り続けたのでしょうか。

今日の学習で新たに気づいたこと、心に残っていることを書きましょう。



タマちゃんとおばあちゃん

ここは、上とよまつ。ここには、モリアオガエルが すんでいて、ことしも あわの たまごを うみました。

そこへ、このすぐ ちかくに すむ いの上の おばあちゃんが やって きました。いの上の おばあちゃんは、

「おやおや ふわふわの たまごが うまれたね。ことしは、きょねんより たくさんあるね。オタマジャクシに なるのが たのしみだわ。」

と にこにこ しながら いいました。そして、まい日 たまごを 見に きて くれるのでした。

なん日か すると、あわの たまごの 中で オタマジャクシが 生まれました。タマちゃんも その中の 1ぴき です。

「わあい オタマジャクシになったぞ うれしいな。」

と よろこぶ タマちゃんを いの上の おばあちゃんは うれしそうに 見えています。

「こんにちは。 ぼく タマちゃん。 よろしくね。」

タマちゃんたちは、早く 田んぼに とび出して じゅうに およぎたくて たまりません。ところが、ことしは、雨が ふらないので、タマちゃんたちが およげる 水たまりが ありません。それに、さいきん いの上の おばあちゃんも 見にきて くれません。

「おばあちゃん、どうしたのかなあ。このままじゃ ぼくたち、ここから 出られないよ。あわの たまごも かわいて しまうよ。」

タマちゃんたちは 日に日に 元気が なくなって いきました。

そのときです。いの上の おばあちゃんが かけつけて くれました。

「ごめんね。タマちゃんたち。ながい こと 見に きて あげられなくて。びょうきで しばらく ねこんで いたの。でも、もう だいじょうぶよ。いま すぐ 水たまりを つくって あげるからね。」

といって、スコップで 田んぼを ほって ふかい 水たまりを つくって くれました。

「やったあ、うれしいな。」

タマちゃんたちは、つぎつぎに 田んぼへ とびこんで いきました。そして、うれしそうに 見おくって くれる いの上の おばあちゃんに

「ありがとう、おばあちゃん。 ぼくたち りっぱな モリアオガエルに なるからね。また あおうね。」

といって、元気よく しっぽを ふって およいで いきました。

モリアオガエルを擬人化し、井上さんへの感謝の気持ちを考える **展開B**

～ 役割演技を取り入れた指導 ～

(ア) 主題名 ありがとうの心 2－(4)

(イ) ねらい 井上さんに優しく世話をしてもらったオタマジャクシの気持ちを考えることを通して、お世話になっている身近な人に対する感謝しようとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「タマちゃんとおばあちゃん」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 モリアオガエルのことについて知らせる。	○ モリアオガエルについて知らせる。 ・日本にしかいなくて、木に泡状の卵を産むこと。 ・オタマジャクシは、下の水たまりに落ちること。 ・最近、数が減っていること。など	○ モリアオガエルが生息する自然条件について分かりやすく説明する。
展開	2 資料を聞いて考える。	○ 井上のおばあちゃんに出会ったタマちゃんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・このおばあちゃん、だれだろう。 ・優しくさな。 ・いつもぼくたちが元気か見に来てくれるんだな。 ○ 雨が降らず、おばあちゃんも来ないとき、タマちゃんはどんな気持ちでいたでしょう。 ・雨降らないかなあ。 ・おばあちゃんどうしたんだろう。 ・このままだとぼくたちモリアオガエルになれないよ。 ◎ 井上のおばあちゃんがやって来て、水たまりを作ってくれ、飛び込むことができたタマちゃんは、どんな気持ちだったでしょう。 ・おばあちゃん、来てくれたんだね。 ・会えてうれしいよ。 ・これで、水たまりに飛び出すことができるよ。 ・これまで世話をしてくれてありがとう。おばあちゃんのこと忘れないよ。	○ 井上のおばあちゃんに会ったタマちゃんが、親しみを感じていることをおさえる。 ○ このままだとタマちゃんの命が危ない不安な気持ちに気付かせる。 ○ おばあちゃんとタマちゃんになって役割演技をさせることで、おばあちゃんに会えた喜びや助けてもらった感謝の気持ちに共感させる。 ☆ 即興的な心情表現を通して、登場人物に対する強い共感を呼び起こし、自他の理解を深めることができたか。
開	3 自分の生活を振り返る。	○ 日頃、お世話になっている身近な人について考えよう。 ・保健室の先生にけがをしたとき手当てしてもらった。 ・地域の人があいさつ運動をしてくれる。	○ 生活を振り返り、お世話になっている人がたくさんいることに気付かせる。
終末	4 まとめをする。	○ お世話になっている人にお礼の手紙を書きましょう。	

(2) 活用のポイント

本資料は、井上さんのモリアオガエルを守る行動やその思いを地域の人を受け継いでいくことから、自然の美しさやもろさに気付き、身近な自然を大切に守ろうとする心情を育てることをねらいとしている。活用のポイントは次の通りである。

ア 発問の工夫

井上さんは、自然を守ることを「自分のつとめ」として行っている。この言葉をキーワードとして、どんな思いを込めた言葉なのかを中心発問として考えさせることで、井上さんの自然保護に対する思いに気付かせたい。そして、自分たちには「つとめ」はないのか、あるとしたらどうすることかを考えさせることで、自然保護を自分のこととしてとらえさせることが大切である。

イ 体験活動の工夫

本校の高学年は、これまでに、総合的な学習の時間でモリアオガエルを保護する活動について学習し、生前の井上さんに会って話も聞いている。したがって、モリアオガエルの育つ自然条件や数が減っていることなどを知っている。当時の写真などを提示したり、これまでの体験活動を想起させたりすることで資料の内容をより理解でき、井上さんの思いに迫ることができる考える。

ウ 資料提示の工夫

井上さんの残されたモリアオガエルの卵の数を記した直筆の記録や日記などの実物を提示することで、井上さんが一生懸命に保護活動をされていた思いにより強く共感させることができると考える。

また、終末で、地域の自然を撮影したビデオを見せることにより、その美しさを改めて感じさせ、それを将来に守り残そうという思いをもたせたい。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

まず、導入では、モリアオガエルの育つ条件や、最近の地域の自然状況について確認した。

次に、中心発問にいくまでの基本発問として、「井上さんは、なぜ日記への記録や枝打ちをした

のか。」「自分の命が残り少ないと分かったとき、井上さんはどんな気持ちだったか。」と問い、病気に対する悔しい思いや、それでもなおモリアオガエルを守り続けようとした必死な思いをおさえた。

中心発問では、「井上さんはどんな思いで自分のつとめとして守り続けたのか。」と聞き、ワークシートに書かせた。

児童は、「モリアオガエルが安心して住める場所づくりをしたかった。」「他の人にもモリアオガエルの大切さを知ってもらいたい。」など、井上さんの思いに共感することができていた。

さらに、井上さんの思いに迫るために、補助発問として「なぜ子どもたちを見学に呼んだのだろう。何か伝えたいことがあったのだろうか。」と聞くことで、「子どもたちにも分かってほしい。」「

自分の後を受け継いで欲しい。」「大人になっても自然保護を続けてほしい。」などと次の世代へ託したい思いを考えることができた。

展開後段では、井上さんの「つとめ」を受けて、「自分たちのつとめは何か。」を聞くと、「自然を壊さないように守り続ける。」「自然を守り、次へ伝える、それを繰り返す。」という自然保護への思いや継承していくことの大切さに気付いていた。

イ 体験活動を生かした工夫

この資料を扱った児童は、これまでに二度モリアオガエルの見学に行っているので、モリアオガエルが無事落ちるように作られた水たまりや枝打ちされた木々、名札をつけた山野草などを実際に見ている。資料文から想像するのではなく、全員が実体験を共有しているので、資料の内容も容易に理解することができていた。

ウ 資料提示の工夫

展開前段で、井上さんが、卵塊の数を毎年書き記した8年間の記録や3年日記を提示した。特に日記は、子どもたちが見学に行った日のことや毎日の卵塊の数が書かれているページを見ることで、井上さんのモリアオガエルを守り育てたい思いを感じ取ることができた。

また、終末で、豊松の美しい自然の風景をビデ

オで見せた。普段見慣れている景色も普遍的なものでなく、守り育てなければこわれてしまうことを資料で学習した後に見せることで、その大切さを改めて感じる事ができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

本資料を中心に、「地域の自然や人と意欲的にかかわりながら、地域の自然環境を守り、地域に親しみを感じる子を育てる」というねらいで各教科等との関連を図った。

総合的な学習の時間においては、地域の歴史や文化を調べ、地域の人に案内してもらって史跡めぐりをする中で、自然の遺跡である洞窟を見学した。児童は、昔の人々が自然を崇拝しつつ、うまく共存してきたことを感じる事ができた。

国語科においては、「未来社会を考える」というテーマで地域の未来の環境問題についてパネルディスカッションを行った。児童は、将来もずっと豊かな自然があるように木を植えたり、ごみをなくしたりしていきたいという思いをもつことができた。

図画工作科では、深まる秋の自然を入れた校舎の写生をすることで、その美しさに目を向けさせた。

また、地域の方とともに芋掘り体験をすることで、自然の恵みを感じたり、関わってくださる地域の方に感謝の気持ちをもったりすることができた。

そして、道徳の時間では、本資料とは別の資料で自然愛護を扱った内容や郷土愛を扱った内容の学習をすることで、一連の関連した学習を補充・深化・統合させていった。

さらに、これらの一連の学習が児童の意識の中で連続できるように、学習の足跡となり、振り返りができるようなワークシートを作成・活用したり、活動内容や児童の感想を掲示したりするなどの工夫をした。

(5) 心のノートの活用

この授業では、終末に「心のノート」P.62 の詩を活用した。

井上さんは、モリアオガエルという身近で小さな生き物を守ることで、地域の大きな自然を守ろうとした。美しく豊かな自然は、普遍的なものでなく、どこか一部分がバランスを崩すと次々にすべて崩れてしまう。だから今の自然を未来に残すためには、身近な動植物も積極的に守っていくことが大切である。

児童は、事前のアンケートで、地域の自然環境はよいと答えた子が多かった。豊かな自然、美しい自然を当たり前と感じていたのである。

そこで、「地球上にある空気、大地、水、光、空、海、草花、動物などの存在が当たり前でなく、奇跡に近いことである。」という内容の詩を読むことで、地域の美しい自然の貴重さを感じさせることができた。



教材活用例(5) 「恐羅漢」

〔中学校第3学年 主題：自然に対する畏敬の念 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

＜素材「恐羅漢」について＞

恐羅漢は、広島県山県郡安芸太田町と島根県益田市との境にあり、西中国山地国定公園に属す標高1346mの広島県最高峰の山である。恐羅漢周辺は1200m～1300mの山々が連なっている。冬には多いときで3m以上の積雪があり、雪質もよく、毎年多くのスキー客が訪れ、ウィンタースポーツを楽しんでいる。しかし、頂上付近は比較的なだらかに広がっているため、吹雪になって視界を遮られると、方角を見失うこともある。

恐羅漢の楽しみ方はウィンタースポーツだけではなく、春には山菜狩り、秋には紅葉狩りなどの散策が楽しめる。1年を通して雄大な自然を感じることができる。また、周囲はブナ林に覆われており、ブナの木の下は長い時間の中で層をなし、その中に水分や栄養分をたっぷりと蓄え、流れ出る水は太田川の豊かな川の流れを生み出し、瀬戸内海へと注いでいる。

本資料で扱っている恐羅漢での遭難事故は、平成20年2月3日に7名のスノーボーダーが行方不明になったものである。2日間の捜索で、広島県警察や自衛隊、地元の消防団など、のべ887名の方がこの捜索活動に携わっている。

【捜索活動の概要】

2月3日

遭難事故発生

ゲレンデのナイター照明を一晩中点し続けた

2月4日の捜索活動

6:00 前 第1次捜索隊として町消防団の2つの分団に出動要請

7:00 現地対策本部を設置

8:45 災害対策本部を設置

2班に分けて遭難者が目指したルートを検索（頂上付近の積雪1.5m）

旧羅漢山付近で、スノーボードで滑った跡のようなものを発見

10:00 第2次捜索隊として2つの分団に出動要請

12:58 広島県知事に自衛隊の派遣要請（陸上自衛隊第13旅団）

13:30 第1次捜索隊の捜索を中断

第2次捜索隊は、午前中の第1次捜索隊の捜索状況をもとに旧羅漢山付近を検索

17:30 第2次捜索隊は、悪天候のため少ない時間しか捜索できず、4日の捜索をすべて打ち切る

捜索活動終了後、現地対策本部にて5日の捜索体制を協議

翌5日午前7時から遭難者の目指したルートを重点的に捜索することを決定

第1次捜索隊に入っていた2名の幹部消防団員の動き

▽ 第1次捜索隊に入っていた山に詳しい幹部消防団員2名が、旧羅漢山付近で方向がわからなくなったと推測し、

第1次捜索隊の捜索終了後、島根県側（匹見）の独自調査を開始

▽ 調査の結果、島根県側に出ている可能性が強いと確信し、すでに決定していた5日の捜索場所の追加を要請

▽ 午後9時に捜索場所の追加を決定

2月5日の捜索活動

▽ 消防団と自衛隊による匹見捜索隊が、午前9時30分、遭難者全員を無事発見保護

発見場所：島根県益田市匹見町国道488号西側の広見川沿い

▽ 防災行政無線と事前の調査であらかじめ配置していた連絡員の携帯電話により、現地対策本部に報告

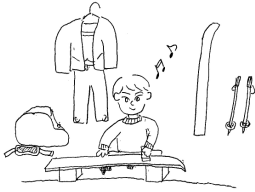
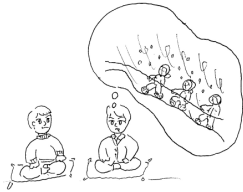
▽ 遭難者の負傷等の状況

3名が軽傷、4名は負傷等なし

ヘリコプターにて病院に搬送

(イ) 4コマ絵

本資料は恐羅漢での遭難事故を素材として扱っているが、遭難事故そのものを直接資料の中で描いていくのではなく、遭難事故を通して恐羅漢を見つめ直す主人公の心情の変化を4つの場面で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼いころから恐羅漢でよく遊んでいた、恐羅漢のことが大好きな主人公のひろし。幼いころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」の言葉が心に残っていた。そのひろしが翌日のスキー教室を楽しみに準備をしているところに、父が話しかけてくる。	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。1回目の捜索活動を終えて、捜索隊の休憩場所で若手の消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」とつぶやく。(遭難から第一日目の捜索終了まで。)	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。話を終えた後、父は「大きいんだよ、恐羅漢は…」と言いつつ居間へ戻っていった。(第二日目の捜索から発見されるまで。)	翌日、ひろしはスキー教室で恐羅漢の頂上に立っていた。しばらくぼんやり辺りを見つめた後、ストックにグッと力をこめて握りしめ、斜面を滑り降りていった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

畏敬とは、「敬う」という意味での尊敬、尊重と、「畏れる」という意味での畏怖という面とが含まれている。自然とのかかわりを深く認識すれば、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。また、この人間は有限なものであるという自覚は、自他の生命の大切さや尊さ、人間として生きることのすばらしさの自覚につながり、とかく独善的になりやすい人間の心を反省させ、生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出していくものである。

恐羅漢ではスキー教室が行われ、生徒たちにとって恐羅漢は身近な存在として感じられている山である。しかし、恐羅漢の自然の雄大さや美しさなどに対して敬う気持ちや、自然はそういった面ばかりではなく、厳しく、恐ろしい姿も持っているという捉えが浅い。その双方の自然の姿を見つめさせることで、自然が人間の力を超えた大きな存在として認識され、畏敬の念が深まると考えられる。

本資料では、子どもの頃から恐羅漢で遊び、祖父から恐羅漢の自然の雄大さを聞かされて育ってきている主人公を設定した。その主人公が遭難事故での恐羅漢の知らなかった一面を知らされることで、恐羅漢に対する見方が変わってくる構成としている。「母なる山、恐羅漢」や「恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった」、「大きいんだよ、恐羅漢は…」などをキーワードとしながら、自然への畏敬の念を深めさせていきたいと考えている。



【心に響くちょっといいはなし】

実際の搜索活動では、2名の地元消防団員の機転が遭難者の発見を早めている。当時、恐羅漢ゲレンデ側の搜索に多くの人員が動員されており、匹見町方面への搜索へは20名程度があたっていた。遭難者はスノーボードをしていて行方不明になったことから、ゲレンデ側を中心に搜索をしていた。しかし、実際は吹雪の中で方角を見失い、匹見町方面に滑り下りていっていたのである。そのことに気付いたのが2名の消防団員で、厳しい自然の搜索環境の中でも、あきらめず人命救助のために努力する姿がそこにはあった。

古くから匹見町に暮らしていた人々にとって、遭難者が匹見町に下りてくる可能性があることは、経験から感じていた。そこで、匹見町の人々は遭難者が町に下りてきたときに安心できるように雪道に足跡をいろいろな場所に残していたのである。恐羅漢の自然とともに生きてきたこの地域の人だからこそのできた行為であり、匹見町の地域の人々の温かさも感じられる。

ウ 資料全文

「恐 羅 漢」

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰り、ずっとスキーの手入れをしていた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノー⁽¹⁾といって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリ⁽²⁾やナルコユリ⁽³⁾などの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした秘密基地のようになっており、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその秘密基地で遊んでいると、祖父がやって来た。

「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」

「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」

ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさん水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの。」

「母なる山、恐羅漢？」

ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」
と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしがその雪を見て、
「このぐらいの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」
と言うと、隣で新聞を読んでいた父は、降り続ける窓の外の雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月3日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月4日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは体がかんじき⁽⁴⁾を掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた2つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」
すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。
「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の捜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での捜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから2日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月5日の朝がやってきた。匹見町での捜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名がたった。捜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には15センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ。」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

- (1) 水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。
- (2) 日本特産で日本を代表するユリ。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。
- (3) 山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追ひ払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。
- (4) 雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるもの。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「大きいんだよ、恐羅漢は」というキーワードに着目し

自然への畏敬の念を考える展開

～話し合い活動を生かした指導～

(ア) 主題名 自然に対する畏敬の念 3－(2)

(イ) ねらい 祖父や父から恐羅漢の話を聞いた主人公が、恐羅漢に対する見方が変化していく心情に共感することを通して、自然に対する畏敬の念を深める。

(ウ) 資料名 「恐羅漢」

(エ) 学習指導過程

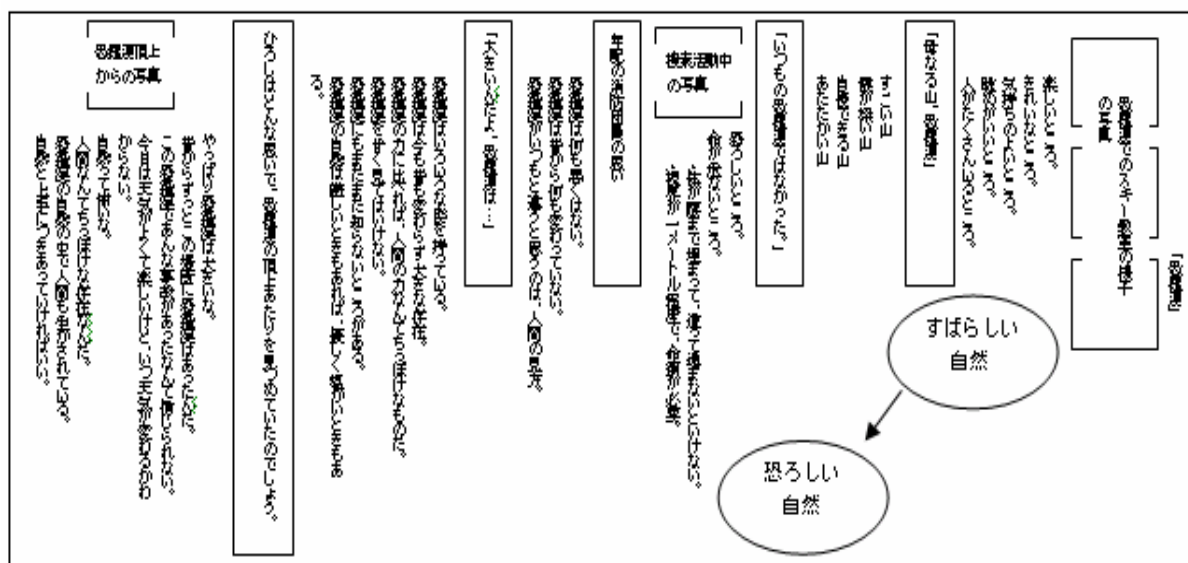
	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	○留意点 ☆評価の観点
導 入	1 恐羅漢でのスキー教室の様子を振り返る。 (スキー教室の様子を撮影した写真)	○ スキー教室で恐羅漢のことをどんな風に思っていますか。 ・楽しい所 ・きれいな所 ・気持ちいい ・眺めがいい所 ・滑りやすい雪質 ・人がたくさんいる	○ 恐羅漢でのスキー体験を振り返らせることで、プラスのイメージをしっかり引き出したい。
展 開	2 資料の前段を読む。 ○ ひろしが幼い頃から感じていた恐羅漢について考える。 3 資料の中段を読む。 ○ いつもと違う恐羅漢の状況に気付く。 ○ 午前中の搜索を終えたあと、年配の消防団員は何を伝えようとしているのかを考える。	○ ひろしは、「母なる山、恐羅漢」ということばから、恐羅漢に対してどんな印象をもったでしょう。 ・すごい山 ・懐が深い ・自慢できる山 ・あたたかい山 ○ 「いつもの恐羅漢ではなかった」とはどんなところが違っていたのでしょうか。 ・怖いところ ・命に関わる ・体が腰まで埋まって、はって進まないといけない。 ・視界が1メートル程度 ○ 年配の消防団員は何を伝えようと思ったのでしょうか。 ・恐羅漢は何も悪くない。 ・恐羅漢は昔から何も変わっていない。 ・恐羅漢がいつもと違うと思うのは人間の見方。	○ 生徒が気付いていない、恐羅漢の「敬」の部分を考えさせる。 ○ 恐羅漢の自然のすごさについて考えさせる。 ○ 恐羅漢での搜索活動での厳しい様子を出させる。 ○ 若い消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」と言った言葉に対して、年配の消防団員が言っていることに注目させる。 ○ 恐羅漢への見方が変わるの、人間の勝手な見方によることに気付かせる。 ○ 今回の搜索活動では600名を超える人が携わるほどの大きな事故だった

	4 資料の後段を読む。 ◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしがどんなことを感じたかを考える。 ○ 恐羅漢の頂上に立っているひろしの気持ちを考える。	◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはどんなことを感じたでしょう。 ・恐羅漢は色々な姿をもっている。 ・恐羅漢は今も昔も変わらず大きな存在だ。 ・恐羅漢の力に比べれば、人間の力なんてちっぽけなものだ。 ・恐羅漢を甘くみてはいけない。 ・恐羅漢のことは何でも知っているなんて思っていない。 ・恐羅漢の自然は厳しいときもあれば、やさしく温かいときもある。 ○ ひろしはどんな思いで、恐羅漢の頂上から、あたりを見つめていたのでしょうか。 ・やっぱり恐羅漢は大きいな。 ・昔からずっとこの場所に恐羅漢はあったんだ。 ・この恐羅漢であんな事故が起こったなんて信じられない。 ・今日は天気がよくて楽しいけど、いつ天気が変わってどうなるかわからない。自然って怖いな。 ・人間なんてちっぽけな存在なんだな。 ・この恐羅漢の自然の中で自分も生かされているんだ。 ・自然と上手につきあっていければいいな。 ・恐羅漢の色々な面を知った上でスキーを楽しもう。	たことを伝える。（その内の20名が匹見町での捜索に携わった。） ○ 学習プリントに記入させる。 ○ 自然の力は人間の力がおよばない程大きなものであることに気付かせる。 ○ ひろしが小さいころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」と遭難事故とを照らしながら、恐羅漢の大きさについて考えさせる。 ○ 厳しさだけでなく、温かさもあることに気付かせる。 ○ 恐羅漢とともに生きてきた匹見町の人々の姿にも目を向けさせる。 ☆ キーワードに対する多様な見方や考え方を交流することにより、自ら自然に対する畏敬の念を深めることができたか。 ○ 祖父や父の言葉から感じたひろしの心情を振り返らせる。 ○ 自然の畏怖の部分だけでなく、その懐の深さに気付かせたい。 ○ 恐羅漢の風景が今までとは少し違って見えていたことに注目させる。
終末	5 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを視聴する。	○ 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを見て、恐羅漢の自然について考えてみよう。	○ 恐羅漢のDVDを視聴させることで、自然への畏敬の念を疑似体験させる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例



【板書の構成】

板書では、恐羅漢の自然に対するすばらしさ（敬）と恐ろしさ（畏）を対比的に表し、最終的には、「大きいんだよ、恐羅漢は……」ということばに象徴されるように、「畏敬」につながるように板書していく。そのことで、恐羅漢の自然には「畏敬」の両面が存在することに気付かせていく。また、恐羅漢の自然を視覚的に捉えさせるために、写真等も活用すると効果的である。

(キ) ワークシート

「恐羅漢」

年 番 名前

父が「大きくなったよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはふんぞり手を
感したでしょう。



(2) 活用のポイント

本資料では、生徒達がもっている恐羅漢の自然に対する畏敬の念をさらに深めることをねらいとしている。「敬」については、スキー教室で感じている恐羅漢の自然のすばらしさを、四季を超えた時間の流れの中でさらに深く感じさせていきたい。「畏」については、遭難事故の様子を振り返らせることで、普段は見せない恐羅漢の恐ろしさを感じさせていきたい。さらには、そういった畏敬は、人間の存在を超えた大きなものとして感じさせていくことが肝要である。その点を踏まえて、以下のような活用の工夫が考えられる。

ア 発問の工夫

本資料には、生徒に注目させたいことばがある。それは、最初に祖父が主人公に言っている「母なる山、恐羅漢」と最初の搜索活動を終えたあと若い消防団員が言っている「こんな恐羅漢は初めてだ」である。これらの言葉は、恐羅漢の自然を象徴することばで、いろいろな姿をもつ恐羅漢を想像することができる。しかし、これらの恐羅漢像はすべて人間がつくりだした勝手な見方で、恐羅漢は恐羅漢でしかないという、恐羅漢の自然の大きさ（畏敬）に迫っていくことが大切である。そのために、話を終えた父が最後に主人公に向けて言っている「大きいんだよ、恐羅漢は……」に注目させ、「大きい」には、恐羅漢の外観上の大きさだけでなく、色々な面をもち、人間の存在を超えた大きな存在としての「大きい」の意味に気付かせていきたい。

イ 話し合い活動の工夫

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」や「その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。」という場面を通して、その言葉の意味をじっくり考えさせ、恐羅漢に対してもったイメージを話し合わせることで、中心価値に迫っていききたい。

ウ 体験活動を生かした工夫

本資料は、生徒がスキー教室で体感している恐羅漢の自然を糸口に、自然への畏敬の念に迫る資料である。導入では、スキー教室を通して感じている恐羅漢の自然をしっかりと出させ、資料の中で

描かれている恐羅漢の自然と対比させる中で考えさせていくことができる。

エ 資料提示の工夫

生徒が感じている恐羅漢の自然は、冬のスキー教室で感じているものが多いと考えられるので、恐羅漢の自然を四季を通して感じさせることで、自然への捉えを広げさせていくことが必要である。

(3) 授業の実際～児童生徒の反応を踏まえて～

ア 発問の工夫

「母なる山、恐羅漢」と「いつもの恐羅漢ではなかった」を対比させることで、恐羅漢の「敬」と「畏」の両面を感じさせることができた。その上で、「大きいんだよ、恐羅漢は……」の意味を考えさせることで、自然の懐の深さを感じさせることにつながった。

イ 話し合い活動の工夫

実際の授業の中で生徒たちは、「大きいんだよ、恐羅漢は……」ということばを受けて、次のような発言をしている。

- ・楽しくもあり、恐ろしくもある山。
- ・長い歴史の中で恐羅漢の自然がつくられている。
- ・人が思うようには動かない程の大きさをもった山。
- ・人も飲み込んでしまう程の大きな存在。
- ・恐羅漢は、美しいだけではなく、自然の恐ろしさを伝えてくれる大きな存在。
- ・親のような偉大な山。

これらの発言からも、生徒たちが本資料や授業を通して、恐羅漢の様々な姿に触れ、人間の存在を超えた大きな存在として自然を考えてきていることが分かる。

ウ 体験活動を生かした工夫

導入でスキー教室の写真などを提示していきながら、スキー教室で感じている恐羅漢の自然などについて思いをしっかりと引き出すことができた。また、授業に対する関心を引きつけることができた。

エ 資料提示の工夫

生徒が知っている恐羅漢の自然は、スキー教室での雪景色の自然がほとんどであるが、冬以外の季節の恐羅漢の自然に触れることで、恐羅漢の自然に対する見方が広がった。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

生徒は、小学生のときから恐羅漢でスキー教室を体験しており、とりわけ冬季の恐羅漢の自然のすばらしさは十分に感じている。それらの思いをしっかりと出させることで、本資料と自分たちの思いをつなげていくことが大切である。その一方で、冬季以外の恐羅漢の自然については、十分な知識や体験がない生徒が多いので、資料中に出てくる冬季以外の恐羅漢の自然環境のすばらしさにも気付かせていくことで、恐羅漢の自然に対する「敬」の部分を広げることも大切である。

また、本資料で出てくる遭難事故当時のような荒れ狂う恐羅漢の自然環境を、生徒が直接的に体験することはできない。そのことを踏まえて、搜索活動中の厳しい自然の状況をしっかりと感じとらせることに留意する必要がある。

自然が身近な場所にある生徒にとって、自然のすばらしさについてあらためて実感する場面は多くない。そのために、お花見弁当やもみじ狩り弁当などの季節行事を設定し、地域の自然の豊かさやすばらしさを再認識する場を設定することが、自然に対する畏敬の念を深めることにつながる。

(5) 心のノートを活用

本資料は資料の内容を考えていくことで、自然に対する畏敬の念の価値の一般化をはかることができると考えるが、より広げるために、「心のノート」PP. 78-79 の「大自然に何を想う」を活用し、そこにある文章を通して、自然を一般的なものに捉えて考えさせることもできる。

このことで、授業の中で考えた恐羅漢の自然の大きさを、その他の自然に置き換えて考えることができる。

